

題長崎行役日記首

紀行之史家之一體也。以居其實不
羨為要。否。少觀者何贊焉。蓋
其人眼界寬間。冲襟浩穰。得一勝
狀。詳之。則一境界。魁一詩。得主。振則
一風月。其篇章傳之。足矣。奚必假

楮毫以強緣飾之乎。但恨近多姦
弄筆者。記性忘異。多演疎語。稗
說眩曜於覽者耳目。使人忽忘矜
憮伏焉。豈敢謂之文辭不朽之乎。
今閱此冊之所載。則徃年嘗陸
之海舶。漂流西洋。乃及諸國之疆

也。府丞之所蘭。雖彼地其處治亦復
寧易如乎。急諭之朝。譯皆監查既
了。遂照條例。支給錢米。奉贍口餉。
至因之後。候風便津。護送瓊
浦矣。於是乃自水府遣官使迎之。雖
引而還。長玄殊者。在支使中。留滯雖

日淺。自相清空。風習威儀。衣幘。主他
玉卓子卓杖等瑣事。見聞所達必丁
寧。國字譯通。不敢滙漏焉。且筑之太宰
府。勢之嚴豎。近湖等地勢。陸立水浮
誰幸迫一。脉立方位。遇會心靈。賦詩
澄古歌。或自下注脚。正當踪跡之。為再

遊之墮焉。宜矣長氏素負登譽之名。
深究天衍地輿之度。竟作圖也。縣象著
明。其功實出千古。予惟老矣。今日序
此集。詒于衆。以俾人學術。業已有
醒於天心之眼。三爾。

文化二年乙丑夏四月穀旦

播州奥田元継題於浪

善松古書堂



長崎行役日記

去昭和二年乙酉十一月碌原村の廻船、数瓦小
吹流され、支國より漂着し、是よりちゆ波がお
伝承して、長崎まで運び来る、これに因る、
本篇乃更も(まことに)計く、予ハ碌原北里山小
代正(アキラカミ)又市をもなし、汽子船(エイシヤン)
郡令れ不知りて、九月廿一日、家を出て水府シナウチ
川、貯吏小林(シロイチ)清生(キヨシ)同式(シテ)居る人ふ、ヒ
シテ、後の九月廿日、水府を立、二日(ハツニ)のハツニ、示
經(シテ)り乃属(シテ)郎(スル)よほく、予ふゆよも、吉日町、大

黒毛馬に病、面白八通等

五日富士刻 監 肉うら、毛羽理毛つね
オメツケカタ

ちよ人邸守乃ゆき行引をねん

車二ツ銭ニツ捷多ニツ之等。二ツ銭也。此處之

丁度入る所もあつた
早速此處へ入らんにあつては
さうもあつた

道光九年秋、細寫八記——
魏源

六日、夜のまゝも清淨もとて、時家の

もむちなり、後おき事に諸國と並行せり

附僕主と申す其の實は如くし〇馬入川、木庭
より六伊賀れ猿橋より流れて来る、白旗村より
神河より金子、宮山といふ、源姓尉乃者と仰せ
不、多度、の首様と、胸の筋ふあり

白旗明神

飛禽已盡奈良弓不減淮陰元帥功昔日
更無麟閣賞孤村空祭白旗宮

大儀の驛、おもてまつたは大儀のむち
乃も、此よハ虎渉あれ回渉あり。略之次

志/心/不/可/以/忘/也/三/日/不/可/以/不/作/此/能/人/不/可/以/不/知/也

ねこらはるのり
リスモトマサヒ
乃様
あ行
人
ひまき、さうし春ハラル
時々の秋のえん

ニシ風

時主一はさの店とまく
てひきのやいひせん
きをもとめ太刀と鉾車
このあはりとハ秋千ね
ともすれりうめくに次れ
あくわつみて

故山原城主

摺葉丹後守殿清善提所
宮長うずくらを紙作鳥記
又高底をあらへ不捨はる
苦川の上大船の定跡

いのちを立く、ありとて建て像を安置し、
けふそぞれうらうらひ、右乃方に面す城の里、中村
とし。江勾川より渡、冬に太陽うきりるをか
あくふ鞠子川とさりげ無く田原より、げゆも
故山原城主

摺葉丹後守殿清善提所
宮長うずくらを紙作鳥記
又高底をあらへ不捨はる
苦川の上大船の定跡

昔山原城主居城し、西へ出れば道の左、石垣山
豊太閤乃に伐の時仰御す。下る
七日、長興山海森山ハ縮素參羅乃建を黄葉渡牛丸
家底をせ
引くや船の舟のうちも
立たれぬる身、もととく
自詠
うつむはわらかげやうき
うさとくみの能をあら

進中、うみをそばうと、諱せひ、奇と云ふ
ウー行もや我空あり、モロモロ人甚の草の
森句、好事乃きの厚利く、通の傍にまくらへ
はの言ふにうれむべし。○牆の茶室ぬまく、
あ地の細工多う。湖冰乃石すらむく詔す、

平松山金創院、東福寺といふ、宝あは五所
太刀、皆鏽くもとて、その傷も如詔。○五所
の御堂文とて、よどむくし、名をあひて
もへばか。山原お詫も時宗か。○、詔はる良
權現、元大出見尊ナ祭ル、
天平宝字年中、万巻丈造立、
其後田祿す。北條泰時再具、
社領二百石、
社主にまくらめ殿と同姓乃
丈人御室より、富貴也くハ
お茶室す。人あひて、
奉宿もと南源金のスムシ
奉宿もと南源金のスムシ

芦北海もとひづり、淺瀬西人小國尔浦より、勅書
あり、女人と武具と、證文なくて、画玉印、渡る
サトハ傷なくて、未通ひ。

函嶺

ほかゆき
けんとうせんすのまへ

東方百二固、石壁萬重山、縱有^{スミ}鷄鳴客奈

何函谷關

先仁帝の時伊豆國三日はす
み地主移を仕候五百石

峠の跡として、登高處也、町並も、至れりの境也、一里
もと山中にて、右の方小坂沿之、一極亘あ哉
その所とて、石壁也。○、二筋蛇形、大山祖^{スミ}の跡を余
は、峠中窮多く、池より緩急し、げふすむ所也

○木貫橋、豆駿北境なり、賣^キ瀬川、ひく一越女^{ヒロ}
轍^リ、かくともく、急坂^{カタマリ}の觀音寺^{カタマリ}にて、こちうぢ
すと安^シきするあり、おのり^シ一里ばかりに長久
保^シとて、言^ハ乃^ハはり大水^{カニ}のうちも、この先船
居候^シ也。新^ハされど、よしとくもとくもと叶^ハまじ
日^ハ沿^ハ浦^ハまつる。
八日^ハみでるを因子北海七里、江底^モを私^シくも
渡^フとて、左^ハチ^ハ李松原^モとて、昔^ハ代^ハ済^アあると新^ラ
んと^シて、取^ハり、右^ハは^シの原、古^ハハ東西^シ三四
里^ハから今^ハ少^ハ水^ハ没^{ナシ}、梶原^ハ生^キ嘗^テ也

長山子卷一言

卷之三

生食一作生唼又生唼

おおむね

まくゆとへりはまくら
カキムミハルタヒムモト
マツリ
カキムミ人
あらばらのまくら
まくらてうきちこすり
ひぬはるかと天のほ
うたりされへまよひた

あうげまのまへ

又は懷了。一所也。松原乃も輕と多てあくま
ま。○原と石をよりの呪す爲て富士の御室
と云ふ、不妙^{フジヤ}を考へる事の付へ御よ頃^{ムサシト}
ノハアメ^{アメ}えこ、天地^{アメノミコト}をあてよりけ^{アメノミコト}と
あふるは謹欽あり、ふゆよ神^{スミカ}の洞天なると雲
聰王^{スミカ}小角^{スミカ}仙人空海、圓珍^{スミカ}と登ら^{スミカ}て今ハ富
士禪定^{スミカ}とて凡俗^{スミカ}と下^{スミカ}と、長崎^{スミカ}より海上百
里^{スミカ}を^{スミカ}漕^{スミカ}かうちもあひ^{スミカ}出^{スミカ}よ^{スミカ}と云^{スミカ}大ト
不二^{スミカ}あふ^{スミカ}又不死^{スミカ}乃^{スミカ}山^{スミカ}と

望嶽

東海芙蓉萬世魁傳言此地古蓬萊峰頭
雪滿常懸月山足雲興忽動雷秦客曾未
富士萬葉書不盡或書不二
靈藥去天孫時颶羽衣來千秋不盡神仙
府何減崑崙十二臺

同

仰見千秋白雪重、天邊削出玉芙蓉、雲間
曉動滄溟日、倒照扶桑不二峯

字伯正玄珠侄
世代儕從遊

とあへきはふとむしゆうと今を家村、をなす原は哉
一五町をまつ乃ふ故今に富吉さうとを、湯殿の
ゆまなまくし。○而そ川を店へ日本一の早川也、
岩削とて富吉たよみをナシモ、恐く渕は
えケ所あり、かれ川と早原も、たら乃川序より
よれ演へをねみて、渕湯鷦鷯女の墓を下野りしき
○蒲原○油舟○蒲原より鳥は、湯原には、原
乃へに坐して、首里子浦とよ、乞東が下と、達磨山地
花あり、え東海の洋と通する、ゆれにえ年餘室
事猶乃呼すめ今代道と算といふ、有りて合致
すあくと不思議入る事無く

けらし所なり、傍了觀うてはすらすとよ○興
津巨鼈山清見寺承玉院、ちひ二百石、庭にて
経と雪舟の草たんとども、又清見の穿竹を虎
あれすとありとせととととととととととととと
得え、雪舟よナセば乃匂梅を、五重塔にまた
かく、壁碑の御書き

題清見寺

躋躇清見寺、山海暮秋天、後宿芙蓉雪、前

浮田子船

江尻子船

一回岩井村の石子帆船も有

原ノ基ニ

九日、岩井原より正右れ方に大内帆船をあり、そぞ
は尾原山とて景阿久子自ら家主一所石塚有
る、江戸へ向ひて、大船十艘、ハ所原草壁の
神なり、且原氏の事途たり、府印の城乃原守
古河間の社あり、と尋ね申すと、曰く「福」
新宮と云ふ、當山の一社、社殿二宇六百石未だ候
姫余と云ふ、裡門まで横つて、御殿奉手屋、
山下すも平地也とあり、新宮水薬湯名ノ一亭、
之能子と建穂子とあひゆゑと、新宮人也、秋之
内と云ふ、上わざとをもんの機とて、すれぬる。

古美子

今朝の天氣が良ければ、
今日はまた晴れる

○寶臺流浮玉流 浮玉流浮玉流 一〇 宝門、うち
度あり、かくと保とてス文とてたるあこ、され
より北よ是人保とて安信奈乞ふわり
建穂子と保とて百石○と越村しりとて、多喜と云
了と女のかへりと○丸子門高もとて五町
トホダシコハ保とて速亨源家長の宝門うり○
宇致のと名物うりとて十郎子成吉と○被く
とてせきれぬとハ茶庵の山みども

過宇都山

秋風千里外、處々擣衣聲、薄暮葛蘿路、旅

ああつむる

前いぢ。故をハ大寺川以
外のそれよりは

経て、かの日金合よや。

人侵霧行

大塙川源遠の境なり、わすへとあく越後立下
のあれよりは

経て、かの日金合よや。

十日、故をゆきく牧の原となりてあと、大正年中
こもれやれりきさるる
しらそ舞りある萬門
のあそ

音妻日記ニ葉々と亂萬門
津納言室守園東よろそ
うて詩を作らる

十日、故をゆきく牧の原となりてあと、大正年中
跡をすと原乃峰にあり。萬門坂上トナ
ら町、宿候をうれ、旅人の礼と萬門坂と觀乃峰
せざき新井川より菊花をあしとひよ、少佐
山のほうに坂下の町、すこじらやあじよどり、手
弱きものと此くころをあわし。幸甚なまひ生
一西行の歌よ柳

過小夜中山

西行

ひまか今りまきたゆ

越此山中

通乃まん中にむき石とくあり、むきのむきに付て

なし、女の鐘をほざくとあくほく人のうゑ

○右れ方津波乃観音寺いづへすの鐘と
玉ノ坂今いづくと云。徽候を日ね乃入

ゆくあらり○巻内ハ鷲山百石○婦の田端の鳥

とくといた邊よひとくよ、松門の塔音布名物
町に不破とつて継承ある。秋葉山へ行道り、西

古山子言

卷三

少くありて十里経り、細田村左の山に暮る
天神乃塚也とし。小笠原よト郎もちあし
不思議に小笠原山とも云。あらわ茶庵^{ハナコヤ}と
考へる。母里正寺とて日蓮上人乃又ねぎやれを
ゆるる。岩舟村を歎歎ム都と放せしと
上乃原^ノ言坂皆言坂場なり。又はハ富士と見
行ひ。豈よばれぬあわといとも富士と見ゆる
れど、たゞハ鷺え。^{ホウ} 泽田乃宿船場もうう
町石よりけん守あき、ひし。平家壁、うだとう
湯谷の齋諱である。たゞ川宿の酒坊の脚より

流すある、この不満戸と京をとみゆ分しと。○
永田乃石の方小溝神本ひ肱あり、筋以三百石
神主をもる五郎とて配教乃子孫とも、今其
演者也下よ宿る、けよ荀、川久保、城の也ふ又
社日祭、諏訪山神あり、いはまも社殿、二重石
柱○、麻坂○、巻井一重石舟、いひ、ハ陰地
あらしり、心願いも大也良か、ゆとなむ今ゆ
とく、清畠所ハ吉田城主より、あもあり、たよ
演名の傳れあと有、ハ亘き一里ほとて石今よ、
と不す、さ原山に寄乃名勝なり、高は

まことに
ほら人の夜よもん停ゆ
りよれのぐ乃被着のひ
一画承ひて年八月二十七日
螺貝止地破き今切となる
たすに

卷之三

加茂先物ハ医療より革を
いづる鳥樂道人の次男
ナリモハえりと吉田エ
居たる物和合の酒敷を

山も三遠乃らひしとく○白浪賀○右田城
○伊奈村がまびの立場小良齋散をうる茶を
あり、すまは加茂先ケとて風船の男しとて
じよすて、店は鶴を一施とたくる

題加藤山人藥肆

鳳来山、首理修仙人來

西云

青松落々帶清風地接鳳来仙路通、幾歲

主人能賣藥也、知市上有壺公、

○洋油○十一日赤ねよ宿、入室さへ沙門寂照
俗名大口定基、みどろれを女の事にて遁
せや」とうれへ音とくゑ女と不ほくし○長次

古歌
育ヤミテヒムカタ
サツミハシトサム

おの新ハチ松平の一臣、家内住ふなり、左は松平
乃卿あり○實就るハ二村山よぢを

セ平陰の久信長記より

大樹寺ハ跡下より今へね
安達とも

古歌

長キモヒヤミテヒムカタ
アシカの川乃書のつら

一田大石川

古歌

メルカハ辛サテ足ノ木缺て
いほとニテ石れ治ハマニ

業ヨカシムカヒルカヒル伊勢

あはるより

加藤抄入破石郡おもと等

三文奇手足日巳

百八十石、けをとれ室坂といふ不そ、ちか徳の武名
神祖章子は江戸をなすへ行ふ不そ、寺領
大樹寺ハ跡下より今へね
安達とも

百八十石、けをとれ室坂といふ不そ、ちか徳の武名
主人のうそもあれど宮に異一ね○矢矧の鷹
長さ二百八百尺、一乃大橋、けふと二河とふ
車ハ右四矢矧、大字とて二つの大橋あるを
左よ津湯浦女乃四之を○本近寺乃入里より
鷹道あり、鷹と今ハキスして、多量もとく、小寺
乃池は蓮子花をのとひす、峰又六井の廻りや

カキツバタ

有間深一作有私

物語の範囲をとく、左の如きは事実
像の如きをもととする
たゞ一月、官はゆる、熱因太ヤシキ神社ヤシキ一方石目ヤシキ武
士ヤシキの官を草薙ヤシキ乃家ヤシキ劍と御體
うへ、同様乃劍せり遙かに次四賊の防とせ、ゆ
へばよきとぞとぞ

執父田宮

當時夷狄入中原、征伐功高、倭武尊、清廟巍然東海道、長無胡馬度關門

称を申すより

桑名津

百里亭帆去、清風波浪平。如何東海道、獨得扶桑名。

官邸にておよきて奈名城下より、食して有市にやまとれ、是より伊勢内宮まで五十町もれてナセ里ナリトモ、遠小舟一隻。

宿舎にて、桑名城下にて、宿舎にて、山門ハナ木もすおみあわのうち

ちりにほくし野原山

やねんをあひとし

金がへるが別室

明和元年九月ほどより大泊乃人うとうとを纏ひぬ
みづの足駄たはりもとを纏ひぬ
吹拂されず涼泊一望而曰
カヤン泊人涼若なれば
正とうえまほよ宝尾たてば
船をねうかむと一泊うち
船合スナヘシの三ヶ月
泊ニテ便い一泊などと
十日行かぬと泊どなし
食をとめて食をとめて

下す行基乃作、再興のとじて一休の冥眼せし事
あり○冷床内門じりハハア寒けとひよ、古ふ
ふえく刀とくとく○鈴鹿山神ハ大傳姬今を爲
つ、清見原の天皇乃とキハ毛羽と況し、田村
牧軍れども女となりかず○いぬ○片
も伊勢近に乃坡と、田村川を流れて田村岸
乃鳥井も、本筋へ又六丁ばかり
十五日ち山路を下る○水口坂下左より甲斐村有
ひり一里望こすりつ大龍乃寺草史よりおもひ
妖怪甚べし○長崎鎮墓某氏 東武入

長山名木
をうる舟カヤン時よりも多
ニ使ふ一怪あめけにて又大
風よわい波石よぶを破る
あま人御記せんもまへ
きのえうち水練の色者も
おほき余の人數多くて
おぬとむしあ京人トもばへ
きのえまたも弱みへ
又弱くれらをとひて少人を又
折くれ勇まうり軍里大内と
よしとトアモ寧波府よ一木一連
はしーあまた自從ととき浦
改ムシムシ活たあふうて人數の
改ムシムシ活たあふうて人數の
改ムシムシ活たあふうて人數の

停らむに付すやまと東北の人に手取ひの邊を
馬卒ともり御もとす。もととひきしる、けはまく
うくせん居し。が漂流人の事とひくよ、僕人れ
きくみ猿狹し。ねえとひだつわ。またとくも
政と語ら。す、乞ううりて、我主人とも安南まへ
酒ゑどりとひと煙えどりわ。○石部○梅木村
和仲 敵とすゆ衣ふ野あり、をほりと假山ヤハラ
盒池カシスイまく道中第一此津食あり、やみたまふ
様長あつて多餘也。しきみゆするや。○よほし
村役後乃は、該可矣。○草津、やま。

左の日、勢田乃は○四月もよれぬのがと、馳せまし
夙京もえしながんぞ、八景のならん、たよろくへ
行遁を、今サヨシ、塚左れ田のけよらう○膳所
塚下げふと哥^レ、いあわく宿とどもじ、松本大津
まそ町^レ、まそと左^レ、義仲寺ととてお畠と
最^レ御乃とまつる墓あり、絶人池^レ、有、う真^レともあす
大坂^レとて病死^レ、坂つ人^レとくとくとく
處^レ、まつりとくとく○生^レたかのむきとすじておみ乃
ゆゑとくとくぬま^レ、水深乃たまむよらむ
深みとくとくぬま^レ、水深乃たまむよらむ

吉欽
ひききてすみのほとく
さはれよまとふま乃
しらかし
手ちゆのむ
引原やふせれが、まかと
ひきよのひまく

乃都より町教にて、人家は多飯のれ宏
过大りニモトキモ宿す、長等山圓塔をもとより、
觀音堂以禮のれもあり、地多く千里の圓塔
窮むるし、加西防食樹林乃用よ寛ぐたれ、
古鐘ハ龍穴より上うそと云信設と水底
あり亦鬼氏ありや、振鉦ホラフクふぢくと、何れもサマ安
みも年々一て鳴とほえ、され象耳の
鐘と人聲あり、外國より傳來の物かくし
小の方へ入ひ町りて、新羅の神（酒）と云
うち大津カツか（）寧明朴町の左の上にあり、經丸

とあるととり、上乃山を越後山せ（）寧ち（）関
津水（）関れ山門皆あのきにそ、寺の名不（）
○近分うて屋食（）休（）入（）平安傳（）下
さは大佛殿（）おそれ落、寧ち（）よう（）

平安城

名山四繞瑞雲深、桓武遷都據上游、本自

東方無問鼎、千秋不改帝王州、

馬（）京（）よ京（）回りて、深ま（）在（）有（）
道、僅（）里（）か（）のま（）と（）坐（）唯（）船（）（）
西（）伏（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）

古文

宿泊するはまことに宿を
して至るにはまことにま
しれ

山峰もこれよりの中なる

乃里○仰見よはく、京橋れどより朝と夕を便ひ
門を九里、ナセの所よりよ坂ふるるれハ幅
山峰もこれよりの中なる
ナセ日乃朝、支酒鴨の下、ハ到處よ着く、古飲より
した江此岸を是より、宿也れどんとて今も未
のめり、升席矣てあとあとあけて食事すかと
すむ所、長崎宿田町酒屋や人若と代吉屋
など、水の字れい旅やあと深まに、さうは被くそ
不自由なれど長町をかねや理と居てあらばり方、
の難

えまよハシはのちと久寺川
よと石

門を九里、ナセの所よりよ坂ふるるれハ幅
山峰もこれよりの中なる
ナセ日乃朝、支酒鴨の下、ハ到處よ着く、古飲より
した江此岸を是より、宿也れどんとて今も未
のめり、升席矣てあとあとあけて食事すかと
すむ所、長崎宿田町酒屋や人若と代吉屋
など、水の字れい旅やあと深まに、さうは被くそ
不自由なれど長町をかねや理と居てあらばり方、
の難

登上

過大坂城有感

江上巍：大坂城、依稀秦主樹功名感陽

長山行行日詒

宮闈猶堪據、難奈東方王者兵、

之の地乃處も東北より方々、所取六百三十セ家
數え子七万七千戸、人數九萬万、守數四百十九、戲
場十、アツク刺繡林ハテ新、諸國乃旦私川邊ヨシマツ通
り、西より敵と、

千艘萬隻

二十日未刻、漫鷺乃下之、其子の御子を抱てて

夕日をみて少し驚いたのである。要いふ
了局の如大仙もよしとほなまくはまば

か二句をひきうちるをすうれ行ひて清風をもよ
同行せし人、埋れ渡甚テツとて、みづちゆけ、道里
げゆく、およびて安治川アシガワに至りとも船人ボウジンもあは
まくほき、身へまづ鼓タム、ほく観門クマノのあそき
城をひくとて、身女舟ヒメヌメイをよめらんとあふ
れ左近サザンへ贈ツルシじせ、身やくわくをもむらんと
涼風リョウブまことに、江南長子カントウノコに送スルとかくわんとく、
廿二日朝被ハタハタまつり、あはりよりたてタテすりて、和
久の鼻ヒコとよ行ハシムふ、歌と風、頬チ風テツいはて室ムロ
をもよす、歌の場ハセへ紹介シヤクゼし人、風尾テツ甚テツに画圖エイドウを

多くを比類ぬる見景下と面白く思ふ。今
是れ入行人也。和久鼻よりナマス丁門上に上
高橋より五百羅漢ありとて詣る
ケ里日西風涼々て御蓬を寒く日を度す。
其五月快晴す。しもかせ止は、お清めをひき下す
尼崎より西宮へ参詣え、けふ是姪鬼三才の内
天丸船宿^{イハク}より奈良へ渡る。かくと云ふ、船
久の鼻より捷徑をあけ四十町半^{シメ}一升
渡してうち、序アリハ尼崎より川舟にて船
み入てわくの鼻よ着く

廿二日晦ちり傳法小漕也。此風よ帆を揚、是よ
海面すのと見え、漸く日出る方仰むれハ少^シと
甲山、武度山、甲、摩耶山、天と接く、其先
ひととき頃广の海、その下の煙帆すなく東南
より太和河舟に諸山、象鼻佐野岸和田紀伊
加田奈波の海峰より南より皆遠島あり、近い
残松尾崎西南に横てど、近づくよからずれ
前後左右遠近は大ふ乃私舟十艘の風帆
うち多數を私て漕つらむ、眺らむ景物

總事

アヤセ白雲三井舟もよ

莫ニ清休足のまなむ

行幸の事

トシモトモ人あらすむ

の事よりはきれつまと

あくよ

東宮うるよ

ねりよ日月へえやアキ

尼寺し、源廣の酒よもじに風はよやとひゆ出
一谷の汀小舟ととくとてれむる、人ふれをす
少子に移り隊よとせ源廣北里銀松たか木先
源氏や行幸北畠遠矢召め、之を傍のと捕等ノ不
うて古松の空よにうきとりする寺ノ門、門を
額よ上野山福澤寺とも、船坂ハモノ軍のとじ
馬盤トガホたるゝとく『たるゝとく』門前ふ若木の櫻、色よ
義経の御城主につく、滝ハ舟せられ山田安養寺うり
軍乃きそきりとく松よ盆の鏡とくとく、寺修
毛毛實物とく、敷蓋の白毛、甲、四脚、五脚、六脚、七脚

うこぎよたことアレ人萬國をほきり、一乃谷の下
ふまきとひだれの色左右ふ合ひよけくわへふ、お
も向よふあり、頭鷲カマクラと舌りうどわきてもくわ
あれと源平ほしとふ、花のとくはくふの実
がくらす、源家の宝屋戸へ汀よらぐにひのう一也
華の縞ハボリくわくに平地乃きうふくわく一丁年、留と
うり、中よ希をのひして古松へまをそ、れの方
ミの合代上の鍔持テツカイるまにはらうしも、源延
尉乃鶴越タカハシ裏ある處おにほらうしも、源延
谷の下汀もと所道のけくに敷蓋の石塔を、沙

五湖乃半とてすよあひて母は余
一谷覧古

近是源平古戰場須磨明石望花ヶ、旌旗
赤白今何在、唯有青山映夕陽。

敗盛墓

松風玉笛響旌懾白雲垂昔日飛花地後
人墮淚碑

一谷

長中行

壽永行宮撫海濱東兵一炬忽灰塵只今
唯有長松樹日暮秋風愁殺人

山中宿也同ふりて汀とく清ゆく、波石岸下
乃門へ船よ入て舟をそひ、大坂より海上十丈里。
次日船たへば、すう追風と呼ぬ、うけて今日
午後二時ほりに姫路城天守閣書写山と
存了ノア次第小室乃瀬モらかく、ノア多
少の後よ小室ノア、东伏願きハ畠石の浦御房
やく、渡御島もがれぬ、浦の浦門ハ丈里
駆け、東面ヨ浦を袂と袂と一色と、漸く木植れ
堆も見て、左より小室の人家も右テとふる
候れどもと云、大鴻ハ山上より太刀の石垣

あくにもうかへ、要ふや秋へ、と鳥へ、春方を常く
ゆきよ
テスカ

八嶋覽言

壽永南巡日海山入戰圖英雄大不返千
歲暮雲孤

女八月

せれ同満為は、陰へよりハシナテアリ小室を
備え候の様あり、モナリニ合ひては便
ちもあく下をあんじとも遠く候事人見ルレハ實
人殺しめ地すて兎も馬も云、鳥戸門にてみつと金を
ぞうし候事多也候事は、辛家代敗事不
レバあらにまわる事無ナ内門口まで海りありてたか
少翁といふありと、南よ御を讀み高の堂は
城園又里映る林静ふ歎ふ海一里えどと
つぶゆれ利り未ゆのこせよ帆を立ま清ひえ
遙ちあよ金毘羅山丸龜峰取立め日暮れす

右は舟で走る事無く、陸^{ヨコスカ}側に風を走るには
船船せぬるも船難、又さうと船中よ船て、伊豫の
島くわづの下小船船を廻し、十月船の底船、
其日衝^{ミクシテ}え里^{シテ}りて安藤のまきは船よやく
此女^{アヒト}と有て娘^{マダム}處なり、まんじうふ、山陽道
乃西京^{ナニキ}へ海上四里、往^ハの今治^ノと写^{ハシ}、松山
城^ヲナニシテ^{シテ}る。

十一月二日過^{ハシ}、三日未^タの刻^ニ漁^{ウニ}、いつま^シ漁^{ウニ}
左^{カバ}は漁^{ウニ}を左^{カバ}は漁^{ウニ}、右^{カバ}は漁^{ウニ}を左^{カバ}は漁^{ウニ}

漁^{ウニ}かし、食^{ハシ}乃^{ハシ}とる
四日比良の村^ノカタマリ^ノにあく、人家^ノ七^{ナナ}
あれうち西北七里^{ナナ}海^ヲ、霞^{クモ}島^ヲすとけて、
西^シを^シ、浦^ノを^シ、北^シを^シ是^モ十^ト里^{アリ}、
まき^シ。○津和○小泊^{ホリ}、柳^{シロ}は^{シロ}と^シて、
鳴^{メシ}も^シ、黄^{イエ}昏^{ハシ}あり、岸^ノも^シを^シ、満^{ミツ}の^シ能^{ハシ}
小舟^ヲ出^シ、夜^{ハシ}ま^シり、舟^ノも^シを^シ、満^{ミツ}を^シ、
曉^{ハシ}、向^{ハシ}の上^{ハシ}莫^{ハシ}なく、石^ノはせんぞ^シ、巖^ノ岩^ノ
乃^{ハシ}、青^シ去^{ハシ}屈^{ハシ}曲^{ハシ}れ^シ、左^{カバ}は島^ヲ長門^ノ侯^ヲ
の名^{ハシ}あると、右^{カバ}の海^ノ人^ヲ見^{ハシ}くと^シ、^シの^シ。

七言

卷之三

年三十日
正月廿二日

武藝云とク角い併木木、^{アラシ}敵多木木、左ハ内裏也
リ、若平取のキモト行官とす、主事也。日久
ああり、故れカ乃石之上木木次第有る者碑
有、^{アリ}
^{ヒテヨシ}豊太密の御陣の記、^{ヒテヨシ}後御上
御船、^ス海より來り、^ス船頭より之を承
自古^{アリ}如^ス事、故れ^ス小倉はく〇十月七日
ああり上木、^ス主事ふく井寺主小倉原侯十又方
石城^ス海岸^ス、城樓^ス大^スて敵守^ス謂
下^ス、檣の毛^ス御正所^ス塔^ス又高^ス、^スよ^スや^ス、^ス謂
今も人^スと^スも^スの毛^ス、^ス事^ス、^ス謂^ス也

これにて至り、既に徳とて亭主之奉行方
托乃端也と申せらるゝ旨上承し、地而密を
唐門へと申すと、さういふ優妙後、徳より通
さうう誇れども、此の事因佐ハモ極のト西シ
平家蟹

題平家蟹

夢中在帝所二十四年榮豈意介虫小猶

遺平氏名

八日未明少翁、体の除とあらまよ半行
けと夢見の場と、風流、上、下、名、景と

すき本巣の處まで食食と、その上乃島不^{ハジ}
櫻^{ハキ}うえ、鷺^{ハク}くいと、お魚^{ハタ}と、宴^{ハシ}と、風^{ハラ}みたまふ、不^ハ
むく是^{ハシ}、九月九日福^{ハシ}大^{ハシ}、皆^{ハシ}は禮^{ハシ}の事^{ハシ}と、
石炭^{ハシ}と、土^{ハシ}と、掘^{ハシ}鑿^{ハシ}て、とて焼^{ハシ}て、
用^{ハシ}、一擔^{ハシ}三四拾^{ハシ}と、直方^{カタ}川^{ハシ}あり、芦^{ハシ}生^{ハシ}れ、
四里、東通用^{ハシ}、北^{ハシ}通^{ハシ}、不^{ハシ}奥多^{ハシ}く有^{ハシ}、さう^{ハシ}
いと、要^{ハシ}を、籠^{ハシ}ふ仰^{ハシ}る、や^{ハシ}す、ハ常^{ハシ}は、いなむ
と^{ハシ}ぬ、與^{ハシ}り

能方村^{ハシ}多^{ハシ}交^{ハシ}、作^{ハシ}社^{ハシ}、銀^{ハシ}百石^{ハシ}大^{ハシ}おも^{ハシ}、
双^{ハシ}木^{ハシ}流^{ハシ}て、福^{ハシ}昌^{ハシ}、後^{ハシ}乃^{ハシ}是^{ハシ}、燒^{ハシ}玉^{ハシ}、
うのや^{ハシ}六里^{ハシ}

家を去り、舊湯をとて、飯塚を宿す。

八日雨す、冷水汗を拭ひ、風ふくひ人暮す。

若狭山宿、跡にて餉し、里人おはて寧府

法海山

古寺み

東へまことに秋の木枯れ寒ふ

衰も葉と烟となり

草家

朝夕かまひと詠さむ

うみをあしらひと詠

あきれと

桜をと人情と詠さむ

中に何ぞねんまくと詠

音歌新梅人の名す

の方に蘿然とハ法海山立波アモ竈山疏
前半の高山たる、松院ハ天狗アモ立波新
後半の山中を仰ぐ、草高山、立波亭ニス坊
草原トモ一ツと餘登山ナム、山を越す二里半
をくぐる山中を仰ぐ、草高山、立波亭ニス坊
草原トモ一ツと餘登山ナム、山を越す二里半
をくぐる山中を仰ぐ、天満宮乃境内古木哉
草方より寧府下到す、天満宮乃境内古木哉
アリて秋さびたり、石鳥居、石橋、二ノ門、別殿、东

樂堂、鐘樓多かり、清々數角のあ私なり、奉
於乃前左了能梅石子で伏せ松より棚を望國

めり、法説亦よよりて坐す。そよ風よ退散とり、
能梅と云ふ人ほりと云ふ事あり。池へ入れ

まつを極め候ひて、をすよつて本
ゆゑに於て之にありと云ふ事も、池中より本

鴨、鶴、鷺、雁等し飼、飼、游泳して人の望無

浦より、お地主即ち乃安樂寺と云ふ十九

处嘉三年二月二十五日右大臣

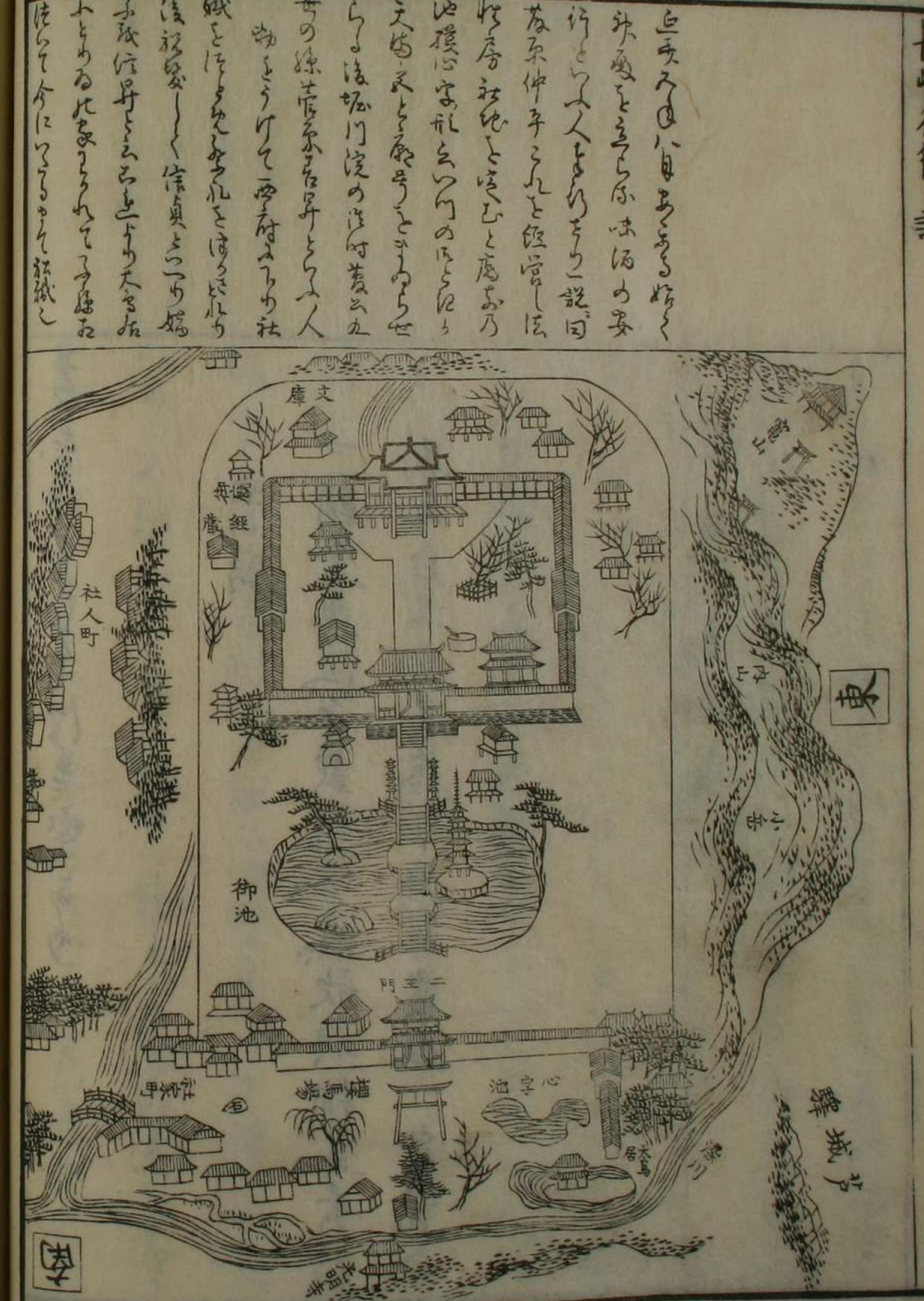
薨于配所葬于安樂寺

年暮承承文建立、今大祭師定ハ首の謹書
を代述焉、是後と号し神官主を稱とたり。
其禮ニハ月ともせずすより來くし、
梅の字ハナめの核より經文を手する也、至而
新たずゆゑふ人を尊信更に金ウツモテ乞を
至る、却て其者無事の人を連すれ候と無用にて
御も慰め主客、万額ハ金又兩、六十枚、三五十六
枚と慰め主客、万額ハ金又兩、六十枚、三五十六
枚と慰め主客、万額ハ金又兩、六十枚、三五十六
枚と慰め主客、万額ハ金又兩、六十枚、三五十六
枚と慰め神前、もまゆし、施主もまゆし是が大
かくもゆきなてはせむるあり

菅廟

一朝登鼎位、千載起儒風、歌與柿山秀詩
同元白、工台星落寧府、霹靂感、^コ 皇宫今
日廟堂上、瑞雲自鬱葱

寧府天滿宮圖





故城を洋木中子石築後の大國小を構是後より給地三子石室府にて奇浦を今て四千石を東徽法親王に属り、備防十六院、三大支司に称す。元、庄主を大名に信歎とし、お江上原、吉永より安原氏とて妻節なむ。其の人を后と定め得。又、京都より奉公の者を遣し、清僧みなり。弟子京都より奉公の者を遣し、高近至つ乃二男なり。次に小島居主も安原氏子である。珍及、匂當、新成流とて、御傳にて、馬守、河内守、各三十石定。三人支司八小室併勢ある。同但馬守、河内守。

聖王親是四王

今北寺祠の事へ墓也

菅家詩

都府樓換者瓦色觀音寺

裡只聞鐘声

一云換字作唯瓦字作貨

一日天判山山中有天拜岩
菅公新天處喜二年事也

人の邊に山、山を越へ度至不ハ内山村のナム聖王
今碑立と云ふ、寧府す一里半東のす
あり、故名也、成壇院、國分寺、比寧府の村のみ
ニ在、都府樓乃述大门乃碑位六人觀音寺の
西よどみ、晚近御子母ねに、寧府終西、寧府
今ハ湖石山里と寧府より一つと云ふ也

代はくとにハ夜半し

九日、神游して至坂上○佐賀坂下をとて、鍋鳩
宿二十又方右レーハ乾達寺碑も云、町ノウナ丁
ヨリナカニテ、北ノウナカニテ、此えす、北ノウナ
ふ高山あり先西南より多羅歌、あり、温泉泉城、
更南より柳川のみ、より久留木乃諸山、あらに

川の石紙すくで
さく様と同しものす

門上山、沙母河你波波船あれと船山ふはれり。
其日ハおもく日雪下りて風をし、牛溝了
居たれ。

十日あめを海傍の山野よ山泥子ありと砂浜を
雇ひま、泥濘毛山白島よみく松浦、奈良毛とさく
んくも皆心をめり、安てゆどき。はふまと
小松とく、姫壁よ有る泥あわり

十一日こすの旅行比擬イリワカ五十國年カニの捕え、是中一は
大もと、圓木引て巻波す、乞うり時ハシは行七
里、舟底底ハシモトに帆ハタケを拂ハシマス、けふハ海に

より大村まで十里余れ入海、向門人僅ふ一二丁
あく波尔乃早得河波の呪つて門内を而
乃廻門ハシモトを、あく海猿イヘルカ奥ハシモトをゆて而し、
長ハシモト一間ハシモトをゆきとて海猿イヘルカのくとし、か浮ハシモトをもあ
りて強ハシモトと、中にも黒雲ハシモトをゆきと氣有ハシモトく船ハシモト
や、首ハシモトの人船ハシモトを入れて船ハシモトよ四面ハシモトを
ゆきとて向ハシモトをも候ハシモトとてゆきとてゆきとてゆきとてゆきとて
ゆきとて一人足すなる行舟ハシモトと、申比刻ハシモトと時原
若ハシモト湯屋ハシモトよ宿ハシモトる

十二日終日は、蟹サガヤキ舟ハシモトと用ハシモトて漁ハシモトる、

是より長時

一里ほどからかへ長時と迎ひ人麻社カミシマモにて
こみ六人来る、もく次れ先仰ておまきりと云、代
を活潰ハラハラに死年ハサキをねらぬ、而もふ絶側ハヤクタ
是と同く長時へ店人マチヒト食事エシタシはすゆよお車
其車乃ハシナガとあめゆハシナガと
銅器とよ、ハツ時長時ハサキは肩く、萬そ富利定カミリり
小林氏、空田氏、高室氏ハ桜町伊勢屋理屋カミリ不
あり、名を銅氏、は鉄氏、旅居リヤウジ中菊庄カキ在
とてはく町のひ名ヒメイ、みを階裏エダシが多頭タヂ
ふる者フロコと至、既て櫻シラク島シマ銀鉢ギンバン町亭チヨウとす
ハ角滿カミラモ結ハシナガ仁ハシナガで首カミ上アゲ下シテ來カミ奉ハシナガ行ハシナガの役人

矣、通車人等カミハシナガとあく、並めて立處タチと爲ハシナガ、
并ハシナガる處ハシナガ國財高尾カツテ高尾カツテハ車高恩顧カミル
あんハシナガと、屢シバタニ回候ハシナガし漂流ハシナガのと、烹ハシナガふのわゆ
あると、金カミのあへ立ハシナガあハシナガと、往ハシナガ國カミ路ハシナガと打ハシナガる
ナ二日、予惜ハシナガの過ハシナガ跡ハシナガくする尾ハシナガをつゝ五花
銭利ハシナガと通ハシナガ一ハシナガと締ハシナガり、今お館ハシナガ清客カミ、文
才ハシナガ人ハシナガ、詩文館ハシナガ名ハシナガの締ハシナガりと、締ハシナガる
ややひづれハシナガ、毛ハシナガ毛ハシナガ、江浦ハシナガ源人ハシナガの門ハシナガ
一ハシナガと諸ハシナガ役人ハシナガ中ハシナガ、毛ハシナガ毛ハシナガと禮服ハシナガ改ハシナガる
案内ハシナガ有ハシナガて、湯ハシナガあり、廻ハシナガすり、漂流ハシナガ人の味

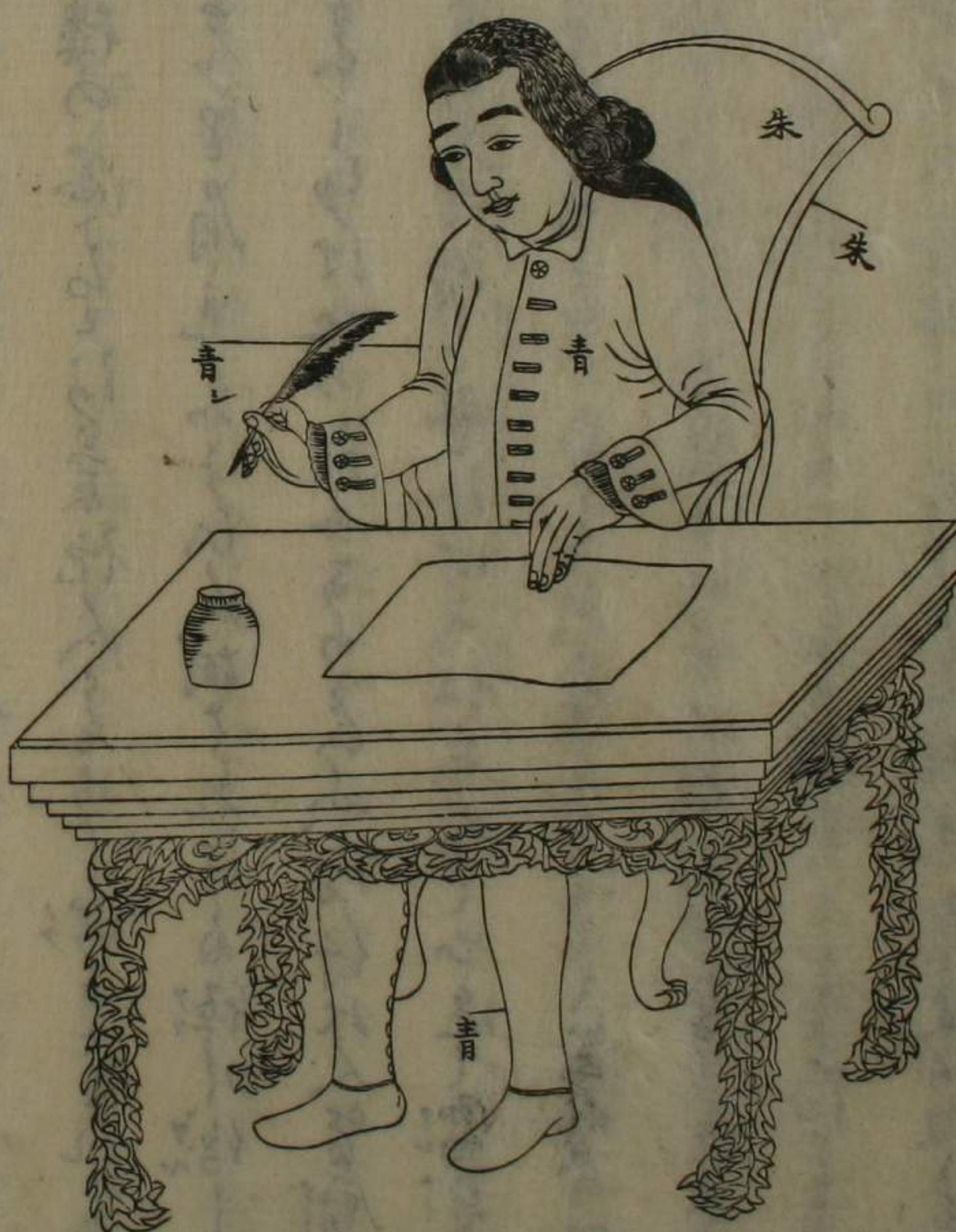
早朝からおもむく門へ出立と旅舎を隔てたの夜
高き山のあはれふを嘆きまわるやうと無代をかぶ
文をまかんばかりとすむ風に吹きぬけゆく
未だほほ清音を紹介の事とねがつむがよし
舟中詩文を渾身を擡げ盡氣民方こそ極め
ましむる（よき機知の詩文達解のれども
十四日より西より船をたてて事のあらざる
室國人の故郷にて一見する所の事のあら
ざむとく内海へ暮れて四方石垣をめぐ
るをじる鷲（アシ）を出す門の側み焉不そ入る
事

宿すれ新竿乃とさ旅館あり、今度は晴る。
樓の窓よりはるる院人ともう、歌をこしと同
志と肩をゑひ人相ぞれける怪（ソレ）傳了女
まししき地の色女ありとふ、同行れ人皆厨子
よりて階を登れば、紅毛人を先遣て嚮樂（アシナイ）
モ紅色をまくらし、此樂（アシナカ）とよび假（カ）
縫衣（カラフ）ゆふ、衣被を此方へ般引のまくらと
くらべ、金（カネ）と銀（シルバ）と銅（タガ）もぬなくあら組（カ）合
せ移下分掌（カハ）くものあま、輕業（カムワ）をまよ似（カムシ）合
えれ羅紗（カムシ）化類（カムシ）

○井伊國よりのそだはら
の本の中とくわぬきげん
猪子の角とひき肉とを
おもてまかすちまか
おもてまかすと自物と
おもてまかすとおもてまか
サガラモ
又筋墨奥と云
タルモメイトルと云
長さ凡ふす魚仔シンキウ
金子もほく
大鏡を所々にうけなく、とあるものとほんじゆ
庄中れ人見あはり堂上もあひど珍疏をす

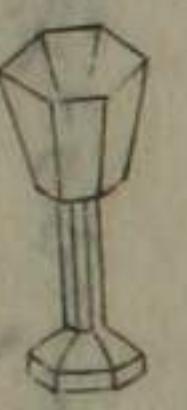
筆とタントストウコト云
鳥の羽乃茎
墨牛江毛根未詳知
蓄語者清浦記之。
華音ハ。モテ。ウト云

筆者リュウトルフロイトン図像



庄をもあく樓上ニカイとてものう方せきとくを敷
中央よ几案ノエをすりけフ拉斯コの注子スのれども
らぬにく、皆右酒スありとひよ、硝フラスコと譯モウシも中止
鼈龍哈蚧カウカイをそあ水タマと高タマハめ、鱗スカビうごくうやく
了リる、例キヨクは文持ローパンをけり、船ボートと筆者吉
生平ナシにさしよたまどくのとくに筆者リユウトル
フロイトヘンといふものかくとて客マサヒを常ルにて長握イツ
と通事人カミニシムを常ルひかくゆすも西ヨシマツを即
萬マニを以て言語イだれは彼カミをなむを代
一イチ千チく後ハシを文持ローパン小庄コヤウと、主シテとよナシアシ

あとも筆者シテ脚シテをとねて筆者シテとセハ筆者シテ書シテ
文シテはれがち雲シテを西シテくらむシテ、左シテの方シテより之に始
て右シテのかくシテ横シテりよシテ、通事人の譯文ヤクモニを
何シテあくシテよシテとシテて、紙シテに方シテをとシテよシテ、
筆シテは石筆シテ乃シテとシテもとの胸シテを左シテから右シテに移シテて、
あよき同シテ右シテを墨シテけとシテゆくとシテ、紅シテをとシテ絞シテは
絞シテ草子シテとシテおシテ、左シテとシテじ、又葡萄ブドウ酒シテを
ア子シテ酒シテ味甘辛シテ砂金入シテフソウロ酒シテもシテ有シテハ力シテれ
室シテ、生シテあシテ奈シテ候シテ、肉寇豆シテふフ拉斯コの注子シテ硝子シテの段シテ



とシテ盃シテかく酒シテを下シテせ、毫シテひづて階



鬼奴
クリンボウ

按今草綱目云、廣南有犧牛、即果下牛形最小小示雅謂之羶、大會編謂之純牛、

厨^クト^{トコ}外^ヲも^レゆ^きて高^{タカ}圍^{ヤマ}を^スく^ルハ^シ未^シ足^シ
牛^{ウシ}セ^ハか^レり^ム、牛^{ウシ}ハ^リ方^カの牛^{ウシ}モ^リ小^シ、
角^{ツノ}短^ク耳^{アリ}物^{モノ}と^スト^シ、時^{ヨミ}論^{コト}、不^ハ謂^ハ櫻^{ヨシ}牛^{ウシ}
也^シ、け^レハ^リ牛^{ウシ}ト^シた^ナシ^ヒ、も^レシ^トハ
道^{トコ}生^ハシ^ム而^シ放^ハ牧^ヒ立^ス

あもん乃姓名事の語と記と、船頭を
カビタンと云ふ者とトモトリ、曰雇ひとテンシヤ、粉
理政とコンハンヤ、料理人とクロス、曰雇とタロスと云
カビタン名ヤンガラス年ニナ四
一回ヘトリあハア、テレヤアハストウチアル年と恰

一己年より私當乃^ハ筆者有名ハヒイトルコストル年四十二
一高年^{トモトリ}游^シる所も有名^ハリユウクトラフロイドシ
「^ハシナセ

一回
ヘースレキコユルコツラ 年とナセ
ヤンテンキケ卫ルリキハニテ

一セ季チ在ルル上外療ニリツフリケウナルトヘミテテ
一カムモニ序下外療ヤンフランステホウトヘニナセ

一西キテヤンテシニシキ 年ニナミ

一五年より在留乃總お候 カスフルハンリソキ 年二十五
一高臺を許れ役 ヤンフレイテキウストル ハニナ四
外より民畜奴ニト四人合シハナセ人

阿蘭池船セモ來く九月廿日帰シ、被乃幸
近百人ノリモレモレシテハシテサシ、定例モ
カロビ丹、因止留ホニシ人、長崎役人モ人、是通事
ミ人ミヒテヒトナ人候シ母ナツル者清モテテハ
馬リテ江戸ヘ來リ、二月勤白湯同シえあり

○長崎入津乃け世人充々ナシ子のモヒヤウ可
長さ百八十間、横ニテ八百半、合數ニナ五萬四、江毛ヒ

ハナリトナリトナリトモ自己ノヒテモハナリ一切佛事
ナシ、このか海町を賣テ水ナシ子ナヒトニ筑シ
南蛮人を招きテナリ御の年もとあ賣入津
港停止マリ、今ハ紅色の館タク成リテ、地主浪富
伊銀合ス十六貫四百目、破一つ役派ミテ用ギ、金少
一テ子兩りヒテ紅色人より多くヤリトシ

紅毛館

王制從來柔遠民、紅毛委貨在瓊津、五風
十雨西洋外勿道東方無聖人

至ルヨリ十禪寺唐人館へ行、大門入キ

三才圖會曰韓子人剝頂
至額方其形留髮於正
中謂之怯仇兒
或曰鼠蘚
生云赤絲也如火者八九
枝亦有



龍廷賢

白色赭薄

便服

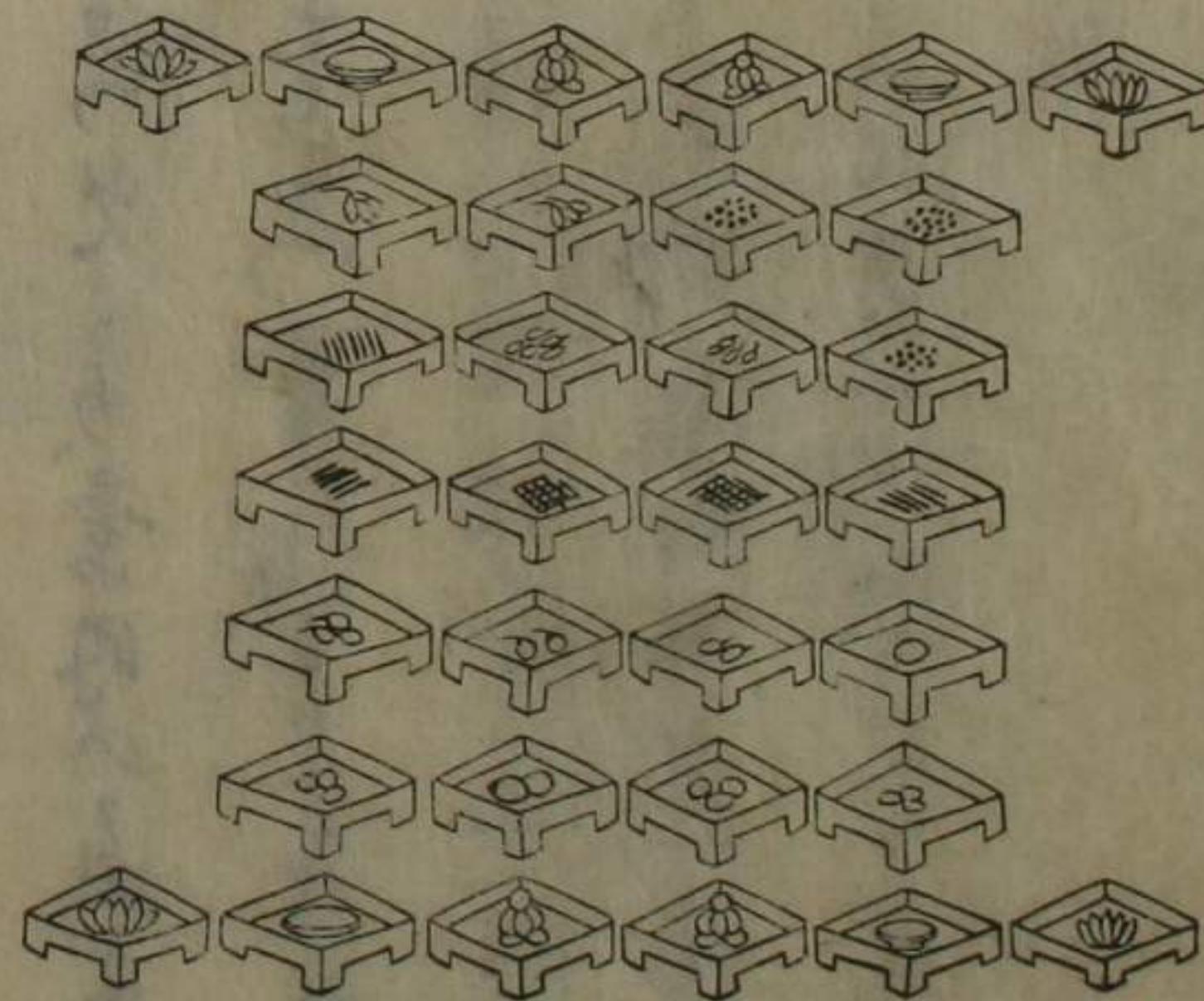
襪子
皮鞋



鼠

ナニカムニ面歌、中門ヤムとまくと秋常トキとせし。
ナニカ厨タケコロの後アフタ清ハシコよとの匂アメり模モみづれ
唐人カラムヒを出スルても携ナガイて寝スル事モノす、やまとよ
も襪ソウを一イチつ脱スルたり、案内アシタの通事トムジン人ヒト高尾タカオに
立タマつものよもやつ革カバ宿スルと唐人カラムヒとがる、即ち
革カバ宿スル、まひもれマヒモレと漢カンきもれキモレ
湯ヨウぬヌかスカテラス、荔リ荔枝ス、鶴ク鶴肉スた果ハタ果ハタと臺タメと
てうナ宿スルと唐人カラムヒのゆヨなナへれ、彼カの
風カとアラスアラス。

あめゆふ國人取のとくにかどりとひの玉、御湯を
み大根乃はうむむなり
唐人よもれ繪法とて秋あまと當の御殿に瀧櫻庵



う学校とかねて仰のむる——あれハ骨董と定めて
曾未決する也とえず、此國禮にて退く、始終不
堪了し、冥帝ヨリ化粧もありといつても兩津紀(イシ)
くちゆくあす禮をしげ十種もん候地ハレハ清
宗園あり(ト)貞享又年辰(ト)より地割多清
ちりありて元録ニ已のもより唐人鍋となる、百
室の四方寛敷拾みうり、同々空手無事と、夜
松ノはれ作もす水ナ一玄の余うちし、高村入は
洋のふの二艘松江(ワシマツカ)、財附(ウラシタク)、總官(ホイテラク)、影長船
ユ、頭控(アハシ)、亞班(ヒヤン)、荷工(サシヨウ)、桟板工(サンボウ)、工船(エボウ)、よトともに百四

六十人舡中より洋出するより

清客館

聞說單于稱帝王年々亂辭至崎陽嘗時
文物何須問可歎衣冠非漢唐

六十人舟中より洋出するより
唐船とも云つて或ハ冰の中央
より一艘も十艘も此岸よりあく、漏ホリジウ乃一高
帆長さ二十丈、横五間、帆柱三十又八、曲四圍
袖三丈二尋子のひと画え、底小窓後乃ニ字を
重字より上より鳥と人と書て伏らば、あり
色濃青墨あり、帆ハ毎帳サホとて次乃あらざる
也

福か私體の方をう
斜ふる焉

南京、福列比舶、年々十艘も入津と許と
是とあるかどよ、うちの方乃う三百石様の私太舶
げとふ候ひたる船を唯一艘より來るといふ、船れ

舶もかくす
舶もかくす



舟廿二艘は、見る見る、
ちやく洋と水と、ねじ石
原坐り人數六十人より、
人まごり、帆へ、各船と、月
夜のまよと、了り度風のね
にまくみと、まくねじ石
船トモ、ほくす

雨いづくはづくて御ひだりからざく、嘆
とのれにて南へ歸れ、無代をかたまつらば
あ書を寫すもすれど回事とお詫び、ねに唐宮
絵巻と紹介とぞ、初の計はハ峰をさ
瑞氣小野花をもたらせ事もなし、絶
えに未だ、よりありわれて、絶えに清め
奇は詩文をちやうかくめ、後子孫もアはと
作り手の跡よ到て聖朝無代へ

ナ又は古寺の写し、楊町沿の你氣肆へ
以、おやだりすが今を漂流人を

少翁詩、太明分野と大圓と云ふ傳を
シテ、又せり、摸写本ありし、アキ文字
乃手撰り河流源流のらひと有、帝一ノ正
ましし、太史公は感動ふあり互に姓名を附
を識とす、後固乃亨、説引さざれ、行將れ
ナウア、額にま、敬慎の二字を扁す、庶安にモ
トテ經營、もとある事なり、本乃祖は唐畫の
品の拟神也、楊聯教牧は空は孤く、或ハ八分
年を蒙る、又廣東未れ小厚見、ミクシイ革
手本を讀手とすてあ。しがちあふとう母核

とよ書をとしとての新後ありとま、アトミ
されハ通家乃事と記れ、而後とあるとあ、すと
この付がとて云、ホモヤシと書と紙われとちの書
一二漢て毛筆と筆と水寫文とん感たる
成称え、你ももありて自ら古事記と偏りて書
じ、主事毛筆とおあり已に涵意と偏り、
とてよ郡吏と急乃用そとて召され即ちと
若く、うの後御多喜又とと修列よ唐令記、
院の圖也果すとぞくと
うち町の少、唐物と某處と多く御呈せ、御内

と傳し極乃至るが、二三、虞世南、歐陽詢
褚遂良、張旭、顏真卿、懷素、柳公權、東坡、元
祐、松雪、其昌、允明、徵仲ふくれら西摺と靈
至と御ひ様帙と飾立ててある傳なり、その外
唐本紙とし、このとき紙今かと紙の侵とあり
てあはる紙と紙と紙と紙と紙と紙と紙と紙
あると傳人とし皆傳動とて是とて、唐本
の本と四書又經義とゆ集とての紙と紙と紙
と紙と紙と紙と紙と紙と紙と紙と紙と紙
と紙と紙と紙と紙と紙と紙と紙と紙と紙と紙

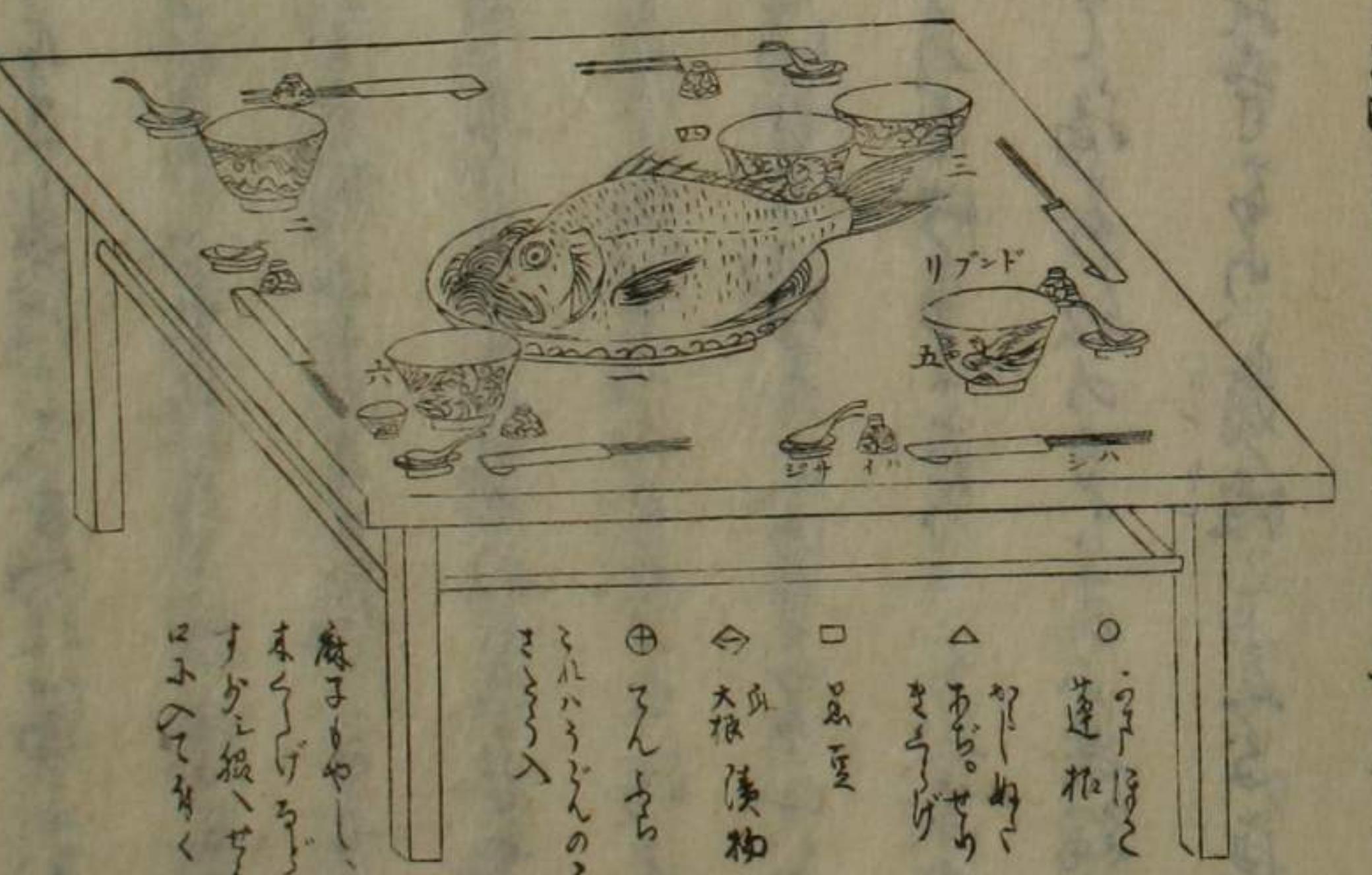
長山行言

店舗のハム卓と云ふ物を乃向
きからに取る。又朋友館了
済の後去すと卓被とさう
事次第ハ又へと卓被を若
主様もツボクあらハ又公家丸上
ア此卓と云ふを也レツボク
あらヘ寄回レツボクハ萬能

左近はまかで思家と名へ今よりはを
争ひ魏に逃れると語ふ、予ヒ又遼人の
事をとるゝれど虜人の口をもとめたりと
菊の室にて食みて其の草子^{シワホク}を纏
ひとひゆ、給仕のもれ小物もさへ有^{ザシ}れ
一素女の人^ノ聞て便り、但取捨^リ而
もぞ羨^ム慕^ム、寄合^ハあ

卓子圖

卷之三



卵、木耳、葱、大、油、八、豆、らん、ごく、あら、ハ、首、う、る

- 大鉢
○二重んうんかけ
○三の广豆麸、葛、蕨
○四鴨、煮芋、なづまん享
○五みそくとタマ、キハラケ
ミソカ青物
○六、まかへ、毛豆び、ねのう
○假 挑玉入らスアヌお次
七を食ふ

麻子めやし、ねぎ、
本くじけやくひも
すがに根へせき

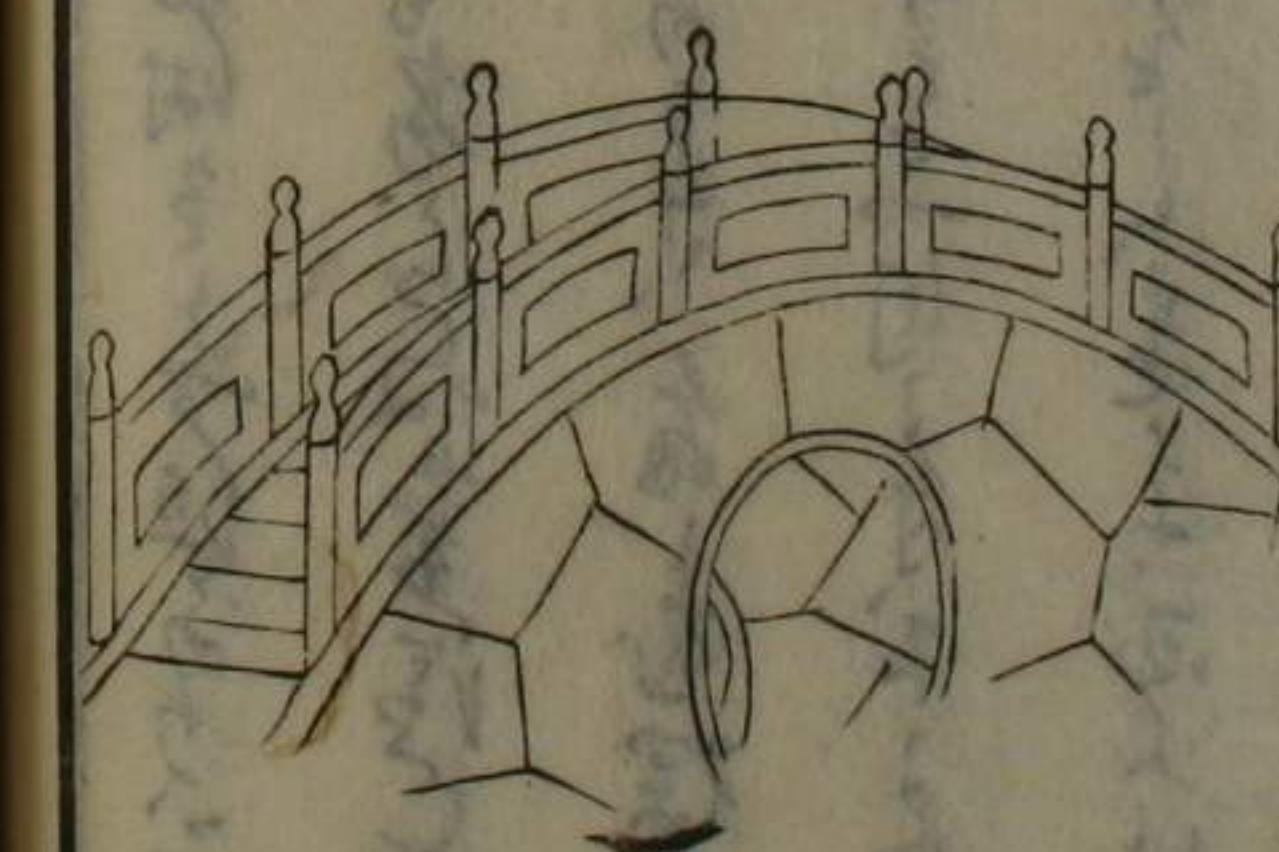
十一、日神社佛寺ノ事ハ皆も東北端ふを蓮寺と
て法華宗乃大寺也。長照院寺曰圓宗也。而も
寺號相打タマシテれま。諸宗姓寺院シテナリ。而も
諸寺也。純中圓寺ノハ云國の唐寺也。而も人
の物入サて建立。據多所も多云。何事も其際
乃も多シ。禍漏寺人淳タキシテあ人の寺。山ハ本在淳
多云。而も人びれども多云。其家之禍寺也。
又云。而も人びれども多云。其家之禍寺也。而も
家之即非也。而も多云。其家之禍寺也。而も
隱え南京人也。而も多云。而も唐者。戸に
火庫クク多々くもて。廣めキル也。代々唐僧也。

招きく住寺也。而も多云。而も多云。而も
唐寺也。而も多云。而も多云。而も多云。而も
清多也。而も多云。而も多云。而も多云。而も
胞也。而も多云。而も多云。而も多云。而も
有。而も多云。而も多云。而も多云。而も
泊也。而も多云。而も多云。而も多云。而も
不。而も多云。而も多云。而も多云。而も
清也。而も多云。而も多云。而も多云。而も
諸寺也。而も多云。而も多云。而も多云。而も

唐今改所と題橋也、此ハ唐船より置上乃書籍
名れ之不すて吟嘯し公儀清閑に分ふ擇取、字
を清合乃れを入れてヤ定うアリムナムトモ、
書物藏と見え文庫ニテアリ、詠訪明神大社ニテ
乃石垣も大なり、あくと墨跡ハ石自由の處々
石橋也同く、大絞橋、

因淺橋有

大鼓橋



眼鏡橋



之外また石垣石橋も峰里のとしそよ
化も又祐む事也、宿院寺火燭もよ
ま屋敷の左店つづりもあそとすと松葉、即

此處和詩多く作る乃は首長唐物曰又種
在人の墨染本とぞあり、其れハ昭和丙午乃
より度てちよて買ひ行家の用意終つてあ
つて此上、あるく供ふれ被御とすて有りを知
し、ゆかむ多一されば、あらまよめいた事半
才にみ、呂望に之般を以、龍被と御し、僕とま
せく書綴り、敏捷宣に言ひをしげと熊
氏より表一封も來以、行清宮詔模庵と西翁
和章なり、豈可謂之乎、張羅文、鰲廷賢の
う焉あらわ敵也詔ナリ、ちうて宿へ平初より

詩文と縁くは、無代と游撲庵との乞をまくし、
寔小而多ふとぞ、予も御おもむく亨とぞ花
子とぞ紀羅鳴小とく、松やんとすくと長草の
旅被とぞむる、春鶯乃と度鑑もかと譜
もすくに草木合へて度足次

○三月長崎ハ北あ國波杵郡鷹富村海とぞ
瓊乃海もゆく、天正乃と海長保、もと島の少
礼不動山をもと元弘の
玉流寓し地を小瀬の浦
居候ちあはす地乃がま
たるを以て地の名と云
ほの名と云て地の名と云

セキタマ院君と如
計三十六人入るも勝
浦公より太宰意在公
為御代の事報として
内教す後は里人の靈魂
と申すて照威君之神と云

化俱多

石高ニシテ家数一三五より又男女數五万武
士セ百二人、移參之テ二、私教四百廿人、般町年奉
八人、内主一人双刀、つ丁代母一人、總合三人也
是、其隊の旗卷乃け一色ハ朱羅元辰トシ
テ人主一色ハ白金、主山乃左今吉不居れ、浦宿
主モ西ヤノミトテあり、若原ノ大河同階アサ
勝山町ノ清代官主木氏アリ、げ配主モ人室
ムナリテ主モアドレム、禽獸トガラシカヒ
主モア、やあれ御番計あり、瑞星候、彷徨候
アモウハナリニヤ御次、主モア、お主、又首モア

船合ハ百人ほて、常流、舟もテア、艘ツノ敷大
波戸内詰毒氣を然不候、主モ原侯トガラシ
合年ニ海モ主とテ、公儀乃清氣威五郎少
五禮、新地を唐人船丸軒、浮足參ニ新、端硝
威を江比浦トアリ、セケ處乃連城鏡臺ハ泉
煎二千石也、松濱侯の台榮寺主モアトムモ、
大波戸流串灯火竈ハ寛文五年唐人画事
中ノ合ノく建トアリトアリ、時乃鐘を矣町
ナリ

○紅毛舶景物ノは未乃波戸モはよリ

赤珠島西川氏のまやに
乃平小人の國を至る峯
ミネルアハ百日と餘
モ辛ふおもむす多々豊
子を詔ひテアキ今我邦
アモスル人令志
利ナリセトシ人令志
事と同人柔軟ナリトシ
トシテアキシトシヒ

メニテ阿美陀乃布國へ其處ノモ既經一方三
千里ナリ、あそニトナハ成の方ノモアリテモキ
ムナリ、國を古ム年波爾亞トメ、國人の西又
白くシテ望乃タニシテ、ラムニ後アリテ
世界を巡行シテ交易シテ、ソヤマシラ
ケミシタニ國ノモナリテ利ナリテナリ
属國ナシキタニナリ安モ云乃トシテナリ
アシ咬噏吧^{シヤガタラ}游アリ、其時トモ諸程ニヨリ
百里ナリトシ、中古ニ未だらん人の海と
アシヒナリテ堪能^{カノウ}シテセ称羅^{ラル}シ

少^シ代官^{シテ}と云^シ也、國より年々貨物^{イナタチ}積^ム送^ス
文咬噏吧^{シヤガタラ}、方乃^{シテ}諸國^{シテ}アシヒナリ
シテ賣^ムする也、小國^{シテ}アシヒナリ
ナリ、^{シテ}年^{シテ}又年^{シテ}與^シ定^ムトシ
シテ、其^{シテ}來^スる。承^テけ咬噏吧^{シヤガタラ}ト^シは多^シ、
其^{シテ}長^シト十四丈^{シテ}五尺^{シテ}幅^{シテ}丈^{シテ}八尺^{シテ}、
帆^{シテ}抱^ム長^{シテ}十里^{シテ}、高^{シテ}丈^{シテ}二丈^{シテ}、
竿^{シテ}高^{シテ}丈^{シテ}丈^{シテ}、帆^{シテ}抱^ム人^{シテ}數^{シテ}百人
候^{シテ}、檣^{シテ}檣^{シテ}、津^{シテ}内^{シテ}出^ス入^ス人^{シテ}檣^{シテ}抱^ム人^{シテ}有^シ、
石火矢^{シテ}の室^{シテ}圓^{シテ}多^シ、アシヒニ^{シテ}燃^ス、
モジ^{シテ}也

御門兵団紅毛の石火矢と
二月五日正午ノ時^{シテ}同
モジ^{シテ}也

又向度船もあへ候たま
と百日もあへ候たま

其度船石失文のよハ赤船
と此總見の軍用船是度見
法へと乗船し
石失文今人云是外湯
と名ゆる也

く手出しとて、門をかじりて出入りし、お宿
おり處は改めて、二百疋乃候お出で、もの時
ち途中地主を乃る。引へて、候事ある。うり
くすまか、え未紅毛ハ西當つて海城し、爾
ふとへキシテ新紅毛とどるが、け方によ。浦
油割れく、船を船ひ乃とさきハ南島の浦倭也
みちるあきれて、こみ縄と、漁也と、堅固も
隔々八いつと九月廿日、そと日、ふと落候矢弓の取
え年行ふ家をハふゝ、野原山と、沖の野遠
見あらう九十里法金遠境まで、帆航えどと

往とむやて帰城す、佐望乃家在ハ深壕城
き黒田氏、福昌のやまとを除よれ様を鍋鳥
市しげ方にても用ひよかま、私、セトまのアラ矢
巻、細中大溝戸又あるハ石墨の高さハ丈尺、上
又銃ニ接テ打く、向後之^{セミタスレ}洋唐銅作里、溝と
横ヨリセモ敵し、首をばらの候り一々又とは、火
槍、一木入代索候みてナヌ禁裏入る、石丸人有
石子て小豆ハ半升、市合とどく、櫛挺^{コロハ}もて持
つる。げん矢矢と音るは、とて、音清中央
鍋釜も持け人死を以て國崩とも思ふ人

乃後をとひてのとくに事はな
人ひとも人乃砲石イシヤをも寄り留めとし、
況えど十隊されへまにとくに

○秋社乃は祭神ハ諏訪、八幡、伊勢、北辰、大神
荒れ秋、稻荷、蛭子ありとて、是日九月廿日也
奉禮大會と、まつた一所にて多と祝
萬町八十町より七年四町よき、毛呂町、奈
町、毛年おほど、善事も餘ら尼寺を以て
主とす、種々比節と車馬て引ひ、又除草
泥モトリ文やと、乞ふ人ハふその禁ヨシにて着ナガマ

主小乃とすもと、唐や紅色キヨクダを威カスガる人
を一人とせし、馬カミもあらんから之馬乃中
より出れ、やはり日本をもとげ日ハ馬の實
國人半らず外を又物を許せ、みどり人ヒトを也
彼處をも、産人ヒトにゆき渡せざる所の如き
彼處をも、ものほろ御事ヨシタシれどもあらむの事の如き
町中比事ヨシタシる年中第一乃忙報ヨシタシとす

○正清仁彦昌物

眼鏡 蝶子 時平 天文道具 玉不石や
雕刻 唐金道具 花色籠 象眼

鱗 沿物産地
海唐紙 花多紙 饭唐紙
造茶 緑喬 根本より一株一束 陳設 姉利
安 菩足袋 五細工 忍筵 造渺渺珠
外療通奥一式 唐船細工 鎌
弓鶴石工 唐様 鬚紙 錦弓弦
南瓜 西瓜 八升豆 陰元豆を下 ジヤボ
密棋アシキ 大五倍 茄芋 流改芋 唐葉子
類 萬葉 杏錢 ヒヨン 麻解 沙羅 白思水
鳥羅保衣 香沙羅 大绳錠 ヨモク
糕 牛皮 賀良錠頭

○南蛮果子

ハルテケシヤアト カステラボウル 花ホウル
コンヘイト アルヘル カルメル ヲヘリヤス ハア
ハアシリヒレウス ヲブドウス タベコソウメン
ヒスカウト ハシ 左の外教不敬奉とく
山水美採筆暫徘徊

長崎

瓊海通夷夏 百年佳氣開 客重譯語至 船
載 貨財來 土俗皆華麗 士人多俊才 可憐
山水美採筆暫徘徊
十七日寅刻長崎を出立日夕漁火を續き人名

ナシタニタキ、カムカム後馬にのむと詠
三里春きハ矢立驛、あれまで見送りれど、麻
社下見そまくを海面と効めて帰る、權所ヒ
役人矣も尾を左の新まちを嘗めしもの日を
大村よりも事と、大おほ後二方ハふね作は是
かんに、また人代あこむすはぬ海も海鷦^{クジラ}
とよとよに觀じよ、漁夫義をとどけた
船もて立候と洋さゆ、鶴松翠波^{レバ}、皆
朱雀寺^{レバ}、くわらのあゆ^{レバ}、義をよびて下知
さるやし船も名前^{ハシタ}とたてあら風一あら萬

シテありて、まよやつること軍ひもことと、
す戸すも今波^{ハシタ}とて、着立^{ハシタ}と因船の音あり、
船^{ハシタ}と因船^{ハシタ}と、正船^{ハシタ}とあらぬ^{ハシタ}來
るて、一船^{ハシタ}とゆうは、あらん中代^{ハシタ}とくら
年よ、大魚^{ハシタ}とゆうをあせらんとくら
十八日宿泊、^{ハシタ}の有

十九日神游

二十日山^{ハシタ}と有^{ハシタ}、けく人室宿^{ハシタ}と有^{ハシタ}
廿一日木屋^{ハシタ}と有^{ハシタ}
廿三日小倉^{ハシタ}と有^{ハシタ}、金^{ハシタ}とゆく出船^{ハシタ}と有^{ハシタ}

あくアラカミ、町家も銀、多めに持て居る
ある方より、ナ丁^トキナよもじよ、席^{シテ}ま山^{ヤマ}高^{タカ}原^{ハラ}も
とふすれ善^シ提^ヒ所^シも、給^シビ三百石^{ミサトク}を借^シる
非^レ乃^ハ是^シ奉^ス、うけまよそ遷化^{シカイ}もどり、ちゆきを取^リ
レ^シつをせ^ルせ、法^{シテ}と墓^シ不^ハ済^ムと宣^{ハシメ}て^リ也、
小笠原^{コガハラ}の生^ハ死^ハ墓^{ツツカ}の内^{ナカ}額^{イニヤイ}ハ字^シ國^{クニ}え^ル即^ハ此^ニ
矣^シ、碑^ヒ據^ス演^{ハシメ}つ^{シテ}アリ長^シ三^ミ年^イ八^{ハチ}月^ツ五^ゴ日^イす、主^シ伊^シ
乃^ハ室^{シテ}主^シ首^{シテ}も^ト居^リ、石垣^{シモロコシ}、而^{シテ}塙^{シモロコシ}、字^{シテ}ふ儀^{シモロコシ}
も^ト法^{シテ}侯^{シモロコシ}の墓^{ツツカ}あり、寢^{シテ}敷^{シテ}乃^ハ後^{シテ}置^{シテ}ひさを改^シむ
乃^ハ像^{シテ}も^ト有^リ、主^シ御^{シテ}、意^{シテ}の主^シハ即^{ハシメ}心^{シテ}の推^{シテ}の事^{シテ}也

名^シと^{シテ}たれぬ^{シテ}も、諸^{シテ}額^{シテ}聯^{シテ}持^{シテ}、角^{シテ}ハ即^{ハシメ}あ^リ、
諸^{シテ}え、本^{シテ}蓋^{シテ}、法^{シテ}雲^{シテ}、乃^{シテ}筆^{シテ}なり、紙^{シテ}オ^{シテ}、^{シテ}額^{シテ}ハ筆^{シテ}一
圓^{シテ}、門^{シテ}乃^{シテ}放^{シテ}廣^{シテ}野^{シテ}、^{シテ}漏^{シテ}露^{シテ}草^{シテ}、^{シテ}放^{シテ}の筆^{シテ}之^{シテ}
文字^{シテ}活^{シテ}す^{シテ}も^ト、^{シテ}書^{シテ}也^{シテ}、^{シテ}目^{シテ}也^{シテ}、^{シテ}眼^{シテ}也^{シテ}、^{シテ}も^ト
送^{シテ}旅^{シテ}也^{シテ}不^ハ得^ム。^{シテ}又^{シテ}書^{シテ}も^ト想^{シテ}ハ細^{シテ}川^{シテ}家の^{シテ}長^{シテ}
うり^{シテ}と^{シテ}も^トあ^リ、^{シテ}去^{シテ}乃^{シテ}生^{シテ}の短^{シテ}母^{シテ}、大^{シテ}友^{シテ}義^{シテ}続^{シテ}
サ^{シテ}繪^{シテ}高^{シテ}外^{シテ}象^{シテ}於^{シテ}堂^{シテ}上方^{シテ}也^{シテ}紙^{シテ}、^{シテ}馬^{シテ}糞^{シテ}丸^{シテ}の畫^{シテ}
より^{シテ}享^{シテ}府^{シテ}の^{シテ}苦^{シテ}席^{シテ}の^{シテ}詩^{シテ}歌^{シテ}也^{シテ}、^{シテ}或^{シテ}う^{シテ}と^{シテ}之^{シテ}
主^{シテ}墨^{シテ}日^{シテ}付^{シテ}、^{シテ}所^{シテ}是^{シテ}あ^シして^{シテ}處^{シテ}、^{シテ}居^{シテ}也^{シテ}。

ナ故にかり、椎木のすゝきをあひ唐筆墨と裁て
足すと詩をうちれらども、予りやより書に控し、
やまととえはあまきのほハモリのテ絶え
身アサヒで賣らと寒く、すでに少ぬとてはあ
よ正月はれをばらスお中の食用として奥ノ一臺
宿アシトおわづか、三度飯とて小食乃品物とぞ
一キ男アセスナリ、女四日ナ五日セト百日アセ
清めえ、日季ナ清ル一晩宿アセスナリ
とみの刻に下代岡アホク
大七日達ム所ア西アモ一晩アトナラズ
龜山宿

アキ宿モ、泊奈海屋に之不アナリ、ろき風景
あり、此よ後アリテ三里所止ヒ方には泡
ちる、ち居ちて紫内と、安徳寺ア陵のアニ廊
有アキ市村本像と安昌寺、左法眼元佐乃
内侍及び平山一族本像と画く左法眼元佐乃
筆下、此の庵、庵主の望族金張附をアハ流
すを裏合致れ始終とある、云假若信う事、
後れふ序より禮乃向人その人ア石塚アリ、云
悉ふナクニ一付と作る。

謁

安徳帝廟

海邊入言寺、帝廟自荒涼、華族僅画碣、戰圖猶畫廊、然燐飛野徑、靈鬼哭沙場、自失龍劍、至今長斷腸、

客數入て宝物と見る、山佛門并ほんめい、正就所れは繪翁又通、漫人乞ひを以て其を通、尊氏御室はそぞ仰仰ある（佐古也之用）、豊太閏の經冊、名のト邦化從文、大内、毛利、吉川、小早川、伏見城書あすき、古事記の手本あはれナニモ教人乃を治あり、せふ是つむにほははる今もとくらへばす。

乍ら、安徳寺の法輪院、海中よりうとうとすとも織りてぬるれ、庭洞ありて絶えずある。寺の名前これ別名である。伏見の太閏の御直奉、太刀一振立ち起立あし、貞親えみ行直奉、あそ人割より九百枚以上ある。あゆの六月太閏、安治より法令をととのひ人馬一頭ますと云、町にて名の碑を立、は石ハ高台の碑柱もあつ、表石、玉門司うえをつら、人を殺す所平生人ほのる、五百枚をも大坂は都をうり、ひまつ町とうふハ娼家

あり、まゆふ御宿などる余處をわ、浪三百回
りてゐるのあと、係も兼どつゞの快幸日
大坂を出る無事、おもむかはほどの湯浴、食事
おもも度し、衆共してくらむ所もあらん、間々、
錦をうなぎも有、済るやうへ義を立てて面見
ありあり、惡方、あら事、駒使、法師、奴ふと省せ、
もどりおも面白し、尼あ人して揚屋の景
内とて、おみみきとも挂てへんとぞれよ門
乃約窓より群集一和合猿合宣稟シテシテをし、ま
すもハ人事をさす、残後三百人をかづりとす、榜

がくと中石などとみて黒ふ雪眉白髮ふゑび
され、さら媚ナヤカれぬとて思ひて、其次乃歎ハ場や
とて物をそむけとて、重きとハニ階下種ヒヨウ、
何とも役者へ取ゆて半身うづき事也、
とて、石見やとめんよとて、左近乃我と、はれ
優かとぞ、鄭衛テイエれ聲女樂テイエれきと、記も
はくはくといて、又うか乃風俗ヒカルを

戯賦遊仙窟五首

其一

深入洞門裏、樓臺別、有春世間都、不管應

是避秦人

其二

仙女顏如玉，含歡盃幾傾。
可憐琴與瑟，猶有鳳凰聲。

其三

美人長袖動、並立玉欄干、為舞霓裳曲、忽
疑到廣寒。

其四

銀燭瓊筵上，青精與玉將。
水樂哉仙窟，趣亦自似劉郎。

其五

燈背金屏暗、香熏錦褥開。陽臺雲雨夢、忽向枕頭來。

今
朝
之
文

黒人乃お、うちよおほの仗走鷹の所、もと
そく不順ゆる小屋、すこりあつたものと經
て、おけ素、首私以、又朝鮮乃海东年、四艘
五艘をあふの少く、漂流と、陸地とぞくに、
乗じて、馬騎、まづれり、前馬、きづくと、トノ
案より、壹岐ノ五十一里、壹岐より、伊豆ノ、モロ
野、野、里十八里、ことのぬ、もと、もと、自東向西

はくま日暮八日西風と、そよて傍か人まよひ
安南記二巻チ飄流海上着と能る
十一月四日又ツオホリ縦を走て北風吹拂
うかく肉防丸室狭と左より上の岸トモツナに
あく、やく、強へ有らばくあり
又日又ツオホリ漁舟五里東より大島と
ともに私我とせめの所左ノ方ハ岩國トモツナノ端
首橋し、道曲りて見ゆ
六日以風もくまもぬにある、海と陸とれるむを
半島よくた河のとし、せりぬれれと風

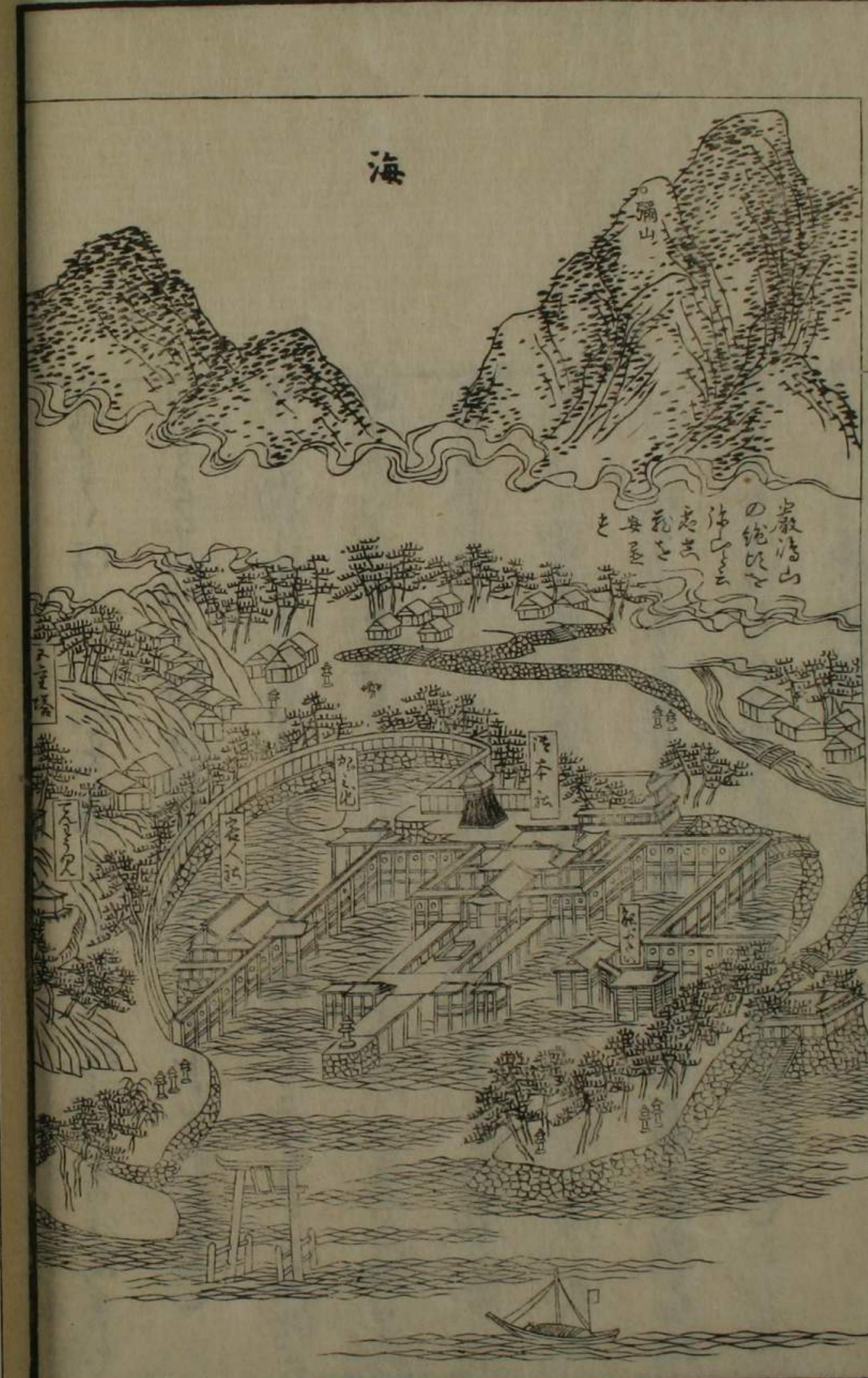
はくま日暮八日西風と、そよて傍か人まよひ
以風もくまもぬにある、海と陸とれるむを
ち自射鳥もりかく半里斗ね山とよ下し官船の
町には、家数ふ射もり端を必ずと見て娘を承
あり、之のは左右ふ岩の國カコミメタとお一方かく、
浦口ふ鳥居と、海テアヘ人陰となりけり浦口ハ本
水の様トすとみ名うり百ハ前代因御多角をあ
ゆみり湯をくまく実ふ母双の松観

嚴鳴祠

島山秀色鬱雀鬼先見海門華表開十二

嚴島圖

樓臺浮水面、忽疑婆竭城中來。



島主は極めて多く、また之が御衣代取ハ附書を
嚴島大明神と云平瀬國乃おもと、裏代額を付取
嚴島不以水と字を書かず、小聖と云風を以つて
名付く者古姓ありに付一ノ島し、島松ハ市松也
モト椎古天皇の御在御院ゆゑ元ハ市松也と
りゆえ、其の後佛家蒙其昌し、辨天代名と称し、此
神の清石ハ多し人をれし、本弘ハ西向御子也

らあつて、言ふ人亦有兩向也、竹屋の御無事であると云
先も湯津娘タチワ命めいとし、ちよへと廊中百八の炮
銃ロウ火水カツルは味シテて歌ハセし、小乃方岩コノカニイシの上アベ五重の
塔と、千尋チヨウを越オチたる敵アリあり、里方シラカニは探スルて脱金ハラフヒ
洞庭ドウテイ乃毎陽樓エイヨウロウとも云ハシマし、赤小豆アカシダ子社サニズメの
お鐵タケ、宇ナケ寺ウナケジ、一坊イボウの船宿ボウソクを、お鐵タケも云ハシマす。うは。
市立年中シテニシテに、此處シテ、紅中カナル、白中シタナル、大糸腰オオシタヒ、腰ヒ、
船宿ボウソクも地ジの所シテあるとて、海シマを隔セバて地ジの方シテに行ハシマり、ああ
長庚チヤウケイ、大元タケシて、」シテあらてて、お船ボウをひき、船宿ボウソクも、
あり、主シテ舟人ボウジン國クニより解雇ハラフし、あはれ、被ハラフはば、海シマ

湯漏ヨウロウ、鉢ハコ、盆ボウ女メイ、歌ハセは、かカよりヨリ、まマとトす云ハシマ及シテ裏
金キネ、絹シルク、なるをスルあハれ人ヒトを、事カニの、さサげゲとトの
手ハンドに、握ハサフとト、あハる、かカの、たタ、やヤハハの、軍クニの、河カニ
海シマ、船ボウ、船ボウ、舟ボウ、舟ボウ、風カニ、豐ヨウ後ゴの、廣ヨウ代タケシ、自シテ宣
モモとト、自シテ今キの、うウ大タケシ、市シテ、中シテ、中シテもモ、歌ハセもモ、
お松マツ、梅マツ、生シテ、歌ハセ、奥シテ、院イニ、御ハシマ、十ハシマ、丁ハシマ、
里シテ、字シテ、絶ハシマ、ちチあハの、諸シテ、島シテ、廣ヨウ、島シテ、の、事シテ、
船ボウ、主シテ、主シテ、歌ハセ、乃シテ地シテ、あハり、をシテ、教ハセ、主シテ、新シテ、
鹿シテ、猿シテ、主シテ、鹿シテ、町シテ、主シテ、歌ハセ、主シテ、新シテ、

食と來じ、只安子もひ別て觸る事無く住候
危くして角威威^{カツカツ}すゆゑ、町家^{マチヤ}の危個^{ハザシ}の處を
皆^{ミツ}角打^{カツタケ}し、鴻乃外浦よ^{ハシマ}此有^{アリ}、たゞそぞまの周廻^{スル}
七里^{セイリ}、舟^{ボウ}は船頭^{ボウトウ}有^{アリ}、船^{ボウ}は船^{ボウ}有^{アリ}、^{カヌ}
島^{シマ}はれ^ハ七里^{セイリ}、浦^{ハシマ}は^ハ七里^{セイリ}、
主^{シテ}は^ハ七里^{セイリ}に^ハ行^カふ^ハ御^{マサニ}御^{マサニ}を^ハま^ハ
日^ヒかんと^ハ門^モへ^{セト}あ^ハ、^{セト}い^ハま^ハい^ハ、^{セト}平^ハ松^{マツ}大^{カツ}森^モ
あり^ハ行^カう^ハ森^モの^ハ、^{セト}お^ハり^ハ行^カう^ハ森^モの^ハ

食と來じ、只女子もひるて觸る事無^カ
危^カて角威^カ居てゆる、町家^アの危個^カも居^カ
首角^カ、鴻乃外浦^アの眼津有^ア、^カまくらまくら周廻^カ
セ里^カ、かよ島^カ翁^カ焉^カハ二ヶ所あり、^コウヌ^カ多^カの宿^カ
島^カ、^カよ島^カ翁^カ焉^カハ二ヶ所あり、^コウヌ^カ多^カの宿^カ
主自^カ身^カを^カ方に於^カ候^カ、^トシテ^カあがめ^カ
い日^カかんと^カの迎^セ門^カ、^カよ、^カよ^カハレ^カテ^カ予^カお^カな^カめ^カ
宇^カな^カ、^カよ^カは^カあ^カれ^カ、^カよ^カは^カあ^カれ^カ、^カよ^カは^カあ^カれ^カ
着^カ所^カ乃^カま^カ、^カよ^カは^カあ^カれ^カ、^カよ^カは^カあ^カれ^カ、^カよ^カは^カあ^カれ^カ
小^カきの少^カと^カも^カ、^カよ^カは^カあ^カれ^カ、^カよ^カは^カあ^カれ^カ

九日寒の海をゆく所北里へまほの山へゆくは
津乃瀬百波はるか今之出久也、送女
ももくほよき新あら

十日あづとれ迎門をもとたの名望のとて親もおま
せうへよみ高トとす／ほうねとせん、
徳もあらずかて清じて可まふ事無ひとておもふ雲
をゆし面白しけれハ後の方も整とてある所は
乃内浦の浦原ま瓦屋自從も立ちく見て
まとひ風毛とし船をり賃息り立て行ふる、日暮
はちう乃日比よ海ふ、鬼のあらうえ三里の間も

はのまんまとまくとて
ゆくとまくやあらし
うつはりてあらのゆのゆ
ゆふと下ちくみるゆの
金はくとんゆのゆのゆ
とれあけちよ人

身に砂すものか

十一日唐琴カタマリ海シマ牛窓ウツマツの津ツ先植センシキ傳ツバシ
を乃はなまくとてゆく、獨ハシモトあゆゆゆゆゆ、中國チホク一
え年イヒから、日ヒよりナセ里あり

十二日日和ヒマツあひて拂ハラフぬ、麻敷マツシまむれ余度ヨリド
もく有アリぬ地ジを越オツせば始ハサハりとてほけや他タケ乃
澤ツバシ川カワを満マツ自ジとシテ、七八、鳥龜トリヨウ、松寧子シノハシコ
あとねアトネ、室乃ムロノの御殿ミヤマニ御禮ミヤヒコを駕ハシるが處シテ
早アリ也、此處コトツル乃景ノカニねまくに立タチ候ハシメた松マツ木キ
札シタの木キハ高タカめ加カ茂モめ大オ木キ事モノも

日正月ヒマツの内ナカふかひとく國クニ行ハシメ六人ロクヒン城シ宿ス乃ナ場マ
ゆく、定シテ二里リ半ハ行ハシメ津ツ乃ナえ八情ハシメえだらまダラマと
二里半リハ城路シヨウの城シあり、入ハシメの仙波センボといふとて昼ヒ食エむ
ハツキとてにあら橋ハシとゆうて見附ミタタの門モと入ハシメ町チ
島シマの島シマと四方各シカク三ミ里リけうち町チ東ヒタチ水ミズ船ボウ以テ
國クニ周ハシメりて濠カニや石垣イシガニあり、それ入ハシメ八合ハチガハ乃ナ大
門モに、町チ東ヒタチとて西シ南ナニれすに天アマ宮ノミコト乃ナ佐サ波ハ
度ヒタチも、市シ店ヂと草シ新ハタチかひのたまタマて仙波センボ
店ヂとて、店ヂとて草シ新ハタチかひのたまタマて

おまよやくひかて書写す。おまよはつらあわる
きと伊勢と得もろしき事れわありやす。おまよ
て見ゆれどキヤムミタマリニ里軒入てハモドア
ヒタマリキ。福多モトム人をあれと今度登山
まきしは。山邊北根をくし。幸浦田銀谷のちゆる人
馬を進み今取きはもつまハ海と因行と満
仙波うちみナアあがの市へ行きよね。むふくも。船子
ノルヒ。日見御満め。はより。まつと。られどうかスナハ町
羊腸丸折れぬと。翠峰山を漸くこよ門より。く
小寺院まし六ナ坊をとり。路乃左の高きまに

觀音殿。南向。木造。三層。柱の下に本堂
改め造了。經堂。金剛。是代。度人。木造。下に
鐘。前も、う。所。此よりて左坊乃右門。入。エ
案内。故乞。には。難僧。あく。嚮導。次。即。それ。翠峰山
ある。ある。而て。歎。也。食堂。上行。玄。鐘。鼓。樓
あり。勧額。あら。と。つ。も。後。あれ。も。そ。支。む。と。
又。主張。二。は。有。て。右。一。或。ハ。焼。先。を。ほ。ま。今。人
なし。諸堂皆。後。醍醐帝。れ。ま。の。遙。宮。あれ。人
ぞ。くる。人。食。を。れ。後。ふ。無。ま。の。遙。宮。あれ。人
候。殊。原。候。れ。靈。堂。有。れ。丁。斗。上。に。罕。い。は。堂。の。毛

是と奥比院とひづへ寺領二万五千石三千九
石後有比叡エイ山伯仲ありしよ次方に裏ヒヤ
豊太因ヒヨウを以と成りて今八百六十石諸事
參拜し坊食庵カニあれど山陽通カナ一の伽藍
やまと山に上て五花石籠カマクラと三月ミヅとすこし
坂本カムラと金興カツイとすとくとゆはのまえ。ヒハ
まくまくほんぐりれハ人氣ヒトヒにて酒クワを
飲スル大ふ淫スミりすとて、書寫スルトモシモヒトヒ里松
ノはく比シテ曉アサヒすとま事カタすとて、もくもくと
山中ヤマノハ流田氏の掲タケとよしと後アフタて匂クモと

七日西シタし人ヒトと大に退アキる次、おみ是より大故
走ハシ五十又里の山上瑞應スイヨウ院とて景カケルとて、まばた
吹風クガも吹スル音ノイハ咽アハらうり落ハリりの誠マサニと定スル
十八日、馬ウマと出ハシく二里、山余サンヨすて馬ウマとはき坂カマツと
もり登アツくすばと出ハシく山余サンヨすて馬ウマとはき坂カマツと
と二里半ハーフマイル下アシくそれ曾根カネ入神スルとま猪シロと
木キ偃松カツラとま御ミ乃ノ名メを、曾公カネはて延ハシく延ハシく

題曾根偃松

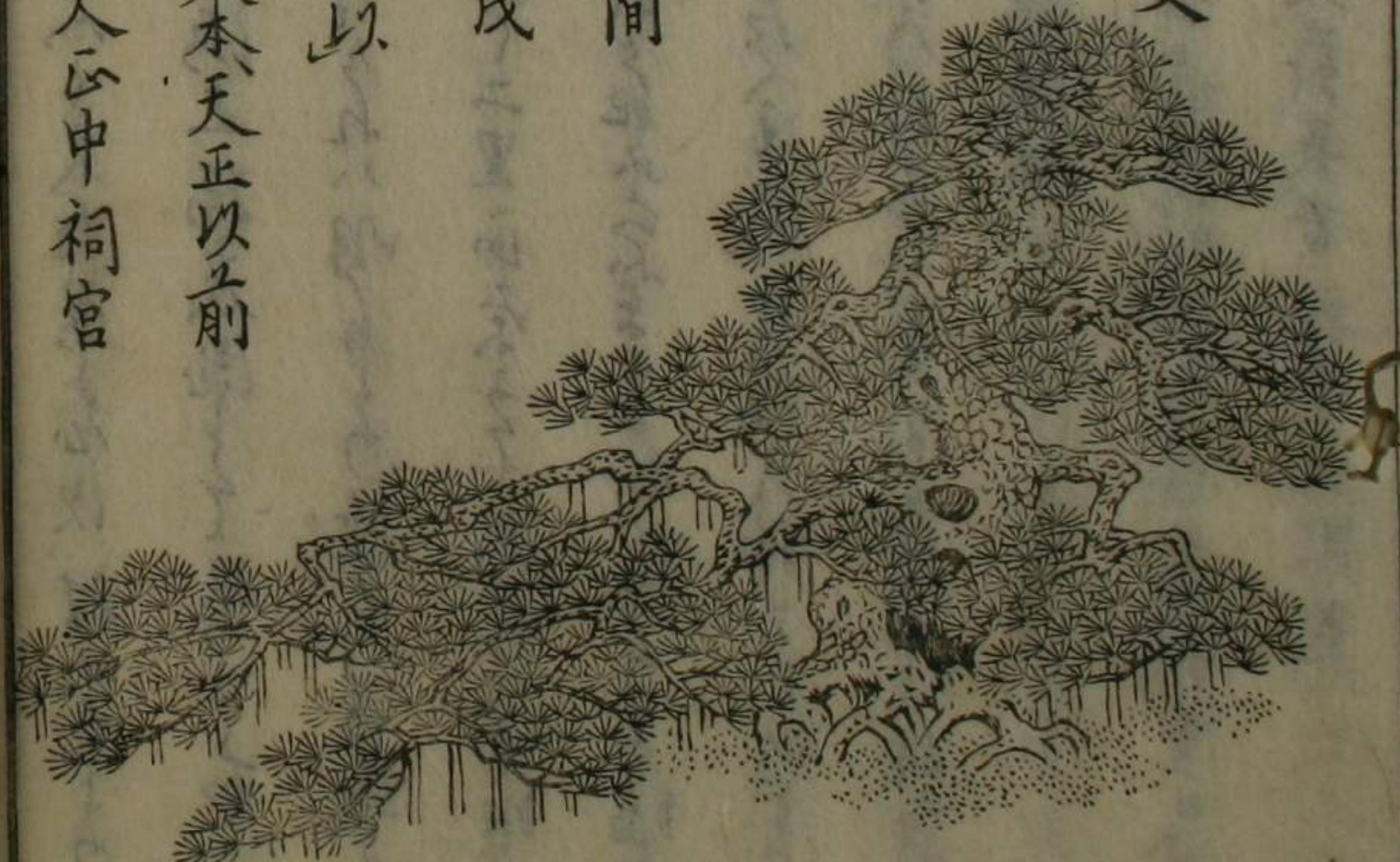
聞道カミド曾公遺愛カネ松盤根偃蓋鬱カツラ重々高風
何ハ借カム大夫爵カム長帶祥雲似臥龍

偃松圖

今計太周一丈
八尺梢二丈三
尺枝自坤至
艮二十間餘
自乾至巽十間
餘其間鬱茂
如偃蓋每枝以

木支之百五十本天正以前

枝葉甚盛天正中祠宮



罹兵火此時西南枝燒枯云

もとより神の主居る所を守る信は石乃實殿と称
すと因す此役を守て松山城を守りてゆく、やうに
ひりてひの碑のわれもてがなびきつゆう櫛
えりの下城より石殿はおは、殿を守る
石山を西向の方祠の傍そよが放ふ刻く里方
か前（トハ離き）ゆきふ竹立すまし
え、またすとあたる松より、祠の左右のうちに
大石子大の外、さすが位太の神とかま附あると
けどもかへるを歌ひて名すと、室へ大已貴、少

大もじりてへるまこと
至りする所のいふを
いづれゆめむ



旅食をとし、まことに四五丁あへてかう傷ふ
乃石よ高竹道とあればねうり、まあは方へゆく
日すとに暮すり、十丁半ほどまで身屈きにかか川
此を過ごしやを寄して通はるもくらひ難し、浦へちて
とまふにまづ乃松尾とれ達、わふへてはゆて見ゆ
りあらぬと云ふ。圓い世人皆をとせしむるを草以
たり、中途より加古川へ行くとす、予ともやへて見ゆ
る者していきあらひ女町をからりてまづ明神よ宿る、社
へ到ひてつとわざを提灯とて往とおれ、金持も
牛糞てをとす、首代松を拂ふ今にうへ植つと。

大もじりてへるまこと
時毛利家に小出氏俊乞
為解云
今松相連生如古松園但無
連枝二幹細小耳
元禄年中國主本多政武公
命使種云近代權大納言
藤基貢

おとねねくまくませの種を
しづくまくまくみがひ松
接一男松女松ト云コトハ根俗
ノ附會ナレヘシ唐ノ名ニ黒
玄赤松トアレトモ峰旗ノ沙汰
ナシ

月升る里より、そぞろに門を敲けハマく松書法
称宣也く西へまじ詣紫朱なりと云、遠國の有
を取ふとねくば早門を穿いて入る、御室ハ
住吉跡跡清と、前了鍾を、松木よりよろづや

傳說曰神后三韓凱陣
時龍神獻之三韓ヨリノ
献上ナルヘレ



いとあやに遠き御もんハ既改れひ誤れ
銅の色正しく赤銅より、衡と銳と細密
文うら御邊にててかく像と鷲自子とやく是を
かくすい、とくとくかかの物とて、此すもよふよ
の松れせを觸とく行種と清酒と松と、松とさ
清とておま内をとくわいが右川よいれ色とねき
十九日、明石城下にまく居候す、町のやまとくたす
石の傍手をまのめぬとく入るゝ町の、向人所に
保よ養テちむきをひの墓石碑(イシヤマ)、中より碑と、書因
方石をのこぼすをす弔文と碑文の代りと歎可

このをきあつてから我今とふ、后とひと早にと
城下乃所陽と、施設もとふとすとひ、行ひの跡と
は忠國と、後仲にまどりらる、忠臣の跡と傳
而と題す、予ヒユア候と仰

樹陰横梨久、一曲寄花情、縱使骨猶朽、長
傳風雅名、

忠度墓圖



あづらニシ町北乃先山の丘小人磨岐水の祠あり、
祠前有照流焉、祠前小碑あり、國々鬼祭
之碑文を存焉るれ接しげ祠前人跡少々有
人也無せ
祠前有角のねれある
ちは寺ノ名とぞて書
れ
まくとあ一太傳の碑
きりにあつれいとぞ
うなよ

漢國
緒田氏云々をもたらす
太政の軍籍多清の事
トも得る所とぞ

満カニ仲哀帝の陵あり又稱れ石塔と、塔前を
見てお孺の琴川を、川といひて水流甚に即一丸
合の西の不戸、然尼、早山、二の驅と申しふる
敷盤地裏より源アモモハ毛白赤く而アモモ
モ今日々匆匆ふ行るを、平知章塚、唐僧塚、經政
義を擧げてにまくづれとおもむけむとて、
川モアモモヒテ乃内入リよかほほのばかり、
よし色と銀て五色のと、色のほかに三株
の出る、曾めらん義賢の塚と有、ちほのあ弱
田のよし野を望むる處に清蓋代塔と、たゞまた

石碑也。小像也。碑建也。云。の御前の御邊に
かへじきなれ事。已。の御邊は。軒て。の範と。に
日。もい。の。善吉。と。ハ。ア。津。也。も。と。と。ん。あ。よ。樂。的
乃。來。連。寺。に。あ。宿。す。う。の。う。人。相。ふ。し。活。曾。
小。姓。相。と。の。像。と。ち。向。よ。と。車。ハ。纏。起。と。設。
サ。日。未。ゆ。よ。漫。川。と。と。く。ん。く。げ。と。の。川。を。常。す。
水。な。し。あ。ゆ。ゆ。河。人。海。よ。あ。と。と。と。と。あ。万。の。境。
あ。し。や。ハ。竹。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
か。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
碑。ハ。大。道。と。う。た。二。町。は。る。鳥。の。中。と。立。成。

萬代先君義公乃。之。主。之。主。之。主。之。主。之。主。之。主。
ニ。モ。壇。ト。ト。

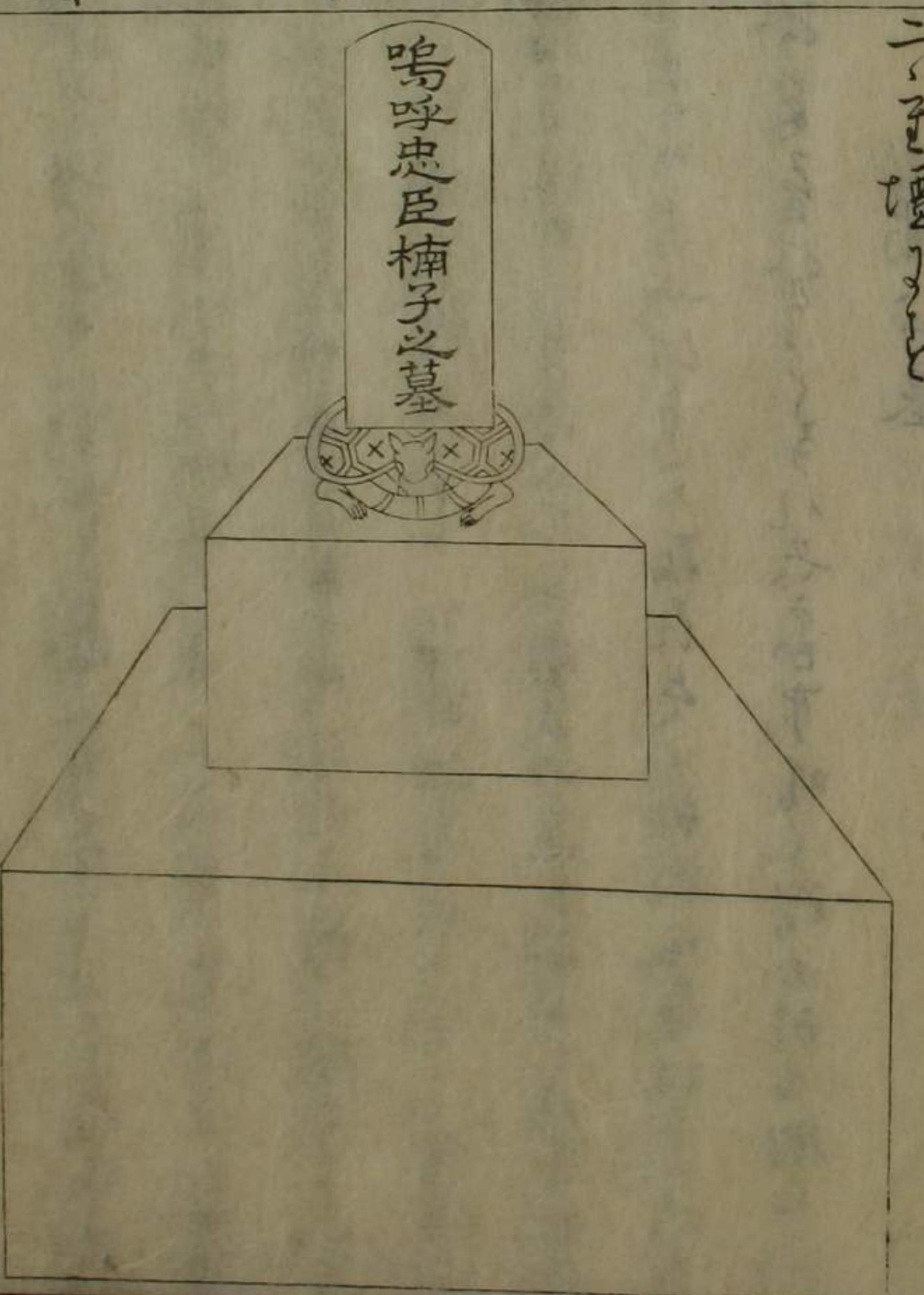
碑石、墳上尺九寸、横一尺八寸、厚一人、青石也、中坦、墳二尺八寸、横八尺、下坦、墳五尺、枝一丈、共白石也、碑面

嗚呼忠臣楠子之墓
之字、八字而
深義公之親年也、擬孔子

頃延陵季子墓云

碑文曰

忠孝著于天下、日月麗乎天、
天地無日月、則晦蒙否塞、人心
廢、忠孝則乱、贼相尋、乾坤反
覆、余聞楠公諱正成者、忠勇



節烈國士無雙、蒐其行事、不可槩見。大抵公之用兵審強弱、知人善任體士推誠、足以謀無失中而戰無不克、誓心天地金石不渝、不為利回、不為害就、故能興復王室、還於舊都。謨曰：「前門拒狼、後門進虎。」廟謨不減元兇接踵、構救國儲、頑移讎、蓋功垂成而震上策、雖善而弗庸、自古未有。而前庸臣專斷而太將能立功於外者、卒之以身許國、之死靡他觀。其臨終訓子從容就義、託孤寄命、言不及私、非精忠貞日、能如是。整而暇乎、父子兄弟、萬忠貞節、孝萃於門、盛矣哉！至今主公大人以及里巷之士、交口而誦說之不衰、其必有大過人者惜哉！載筆者、無所考信、不能發揚其盛美大德耳。

右故河擣泉三州守、贈正三位、
近衛中將、補公贊明徵士辨水
朱文瑜、字魯卿、之所撰勒代
碑文以垂不朽、
碑文十行跋文三行字
數總計三百三十字也

楠公墓

研陰の文を大順の儀士朱彝冰乃撰也、里人呂方
代宗後年、率領の軍を率て、瓦剌を逐て、而後孫子左
大順も、まことに彼つゝもと一工手、而し屬せし左
侯比之あま也、是より又十町地乃山陰に楠守る、嘗
て山廣教導もとて、海龍砦布代とよえ、海龍砦
極とほせり、やむとて、楠公の像を、毎日忙軍祀を
さるありとく、げよハねひ矢田紹教役奉本村あり、かま
れ日月星れども、あれ共、家をすまへて、碑の前も仰
極とほせり、やむとて、楠公の像を、毎日忙軍祀を

雲北極昏、腹心推士卒、忠蓋及兒孫、冰此
留碑石、使人掩淚痕。

モトナリ十町あまと東北面の神よりて、神ハ龍
田女、今モテ御切皇后也と記。跡諸社附二百石有
とく、權多々の役乃職相前もと、稱せて國の、尾
高の子、敷蓋えは行ふれ傳ふる、る勢二百石、左
右隊木並御支、たの時とおもてし、首先序にて
おもて、御内河系足と方々縦有、また川いはま
比き御も以て、は川八布門跡乃下流也、下川一川
水は今も御み所平にてみずし、滝八道下ると
言ふ
あたはりこれ下は水のみ
なまじまうちたるる
川也

萬里をへりとせえす、古事記に因るて
是れをとれ。

題布引飛泉

千尋布帛色、長瀑碧石山、隈、纖女機中物、應

從銀漢來。

万葉集

田舎の宿

第一大木も男の妻と
おとすひし女の夫と
まもれ

大和の宿

菟名員處女
すきぬあさあけんは
のまにいきなみ川ハ名のみ
さうりき

右の方に酒を切名村といふ、さすに水宿して度十
左はするといふ小山也、言ふまく女^{ヲトメ}女隊^シ二男子
乃塙とばきふあれへ、また武の者小山田をけ
くすむと並^{カンガ}吹ササ^ハに、たゞへい甲山天玉を擇
ふ富士とすみあらそく、清氣の美、青色深苔

右
第一大木も男の妻と
おとすひし女の夫と
まもれ
大和の宿
すきぬあさあけんは
のまにいきなみ川ハ名のみ
さうりき

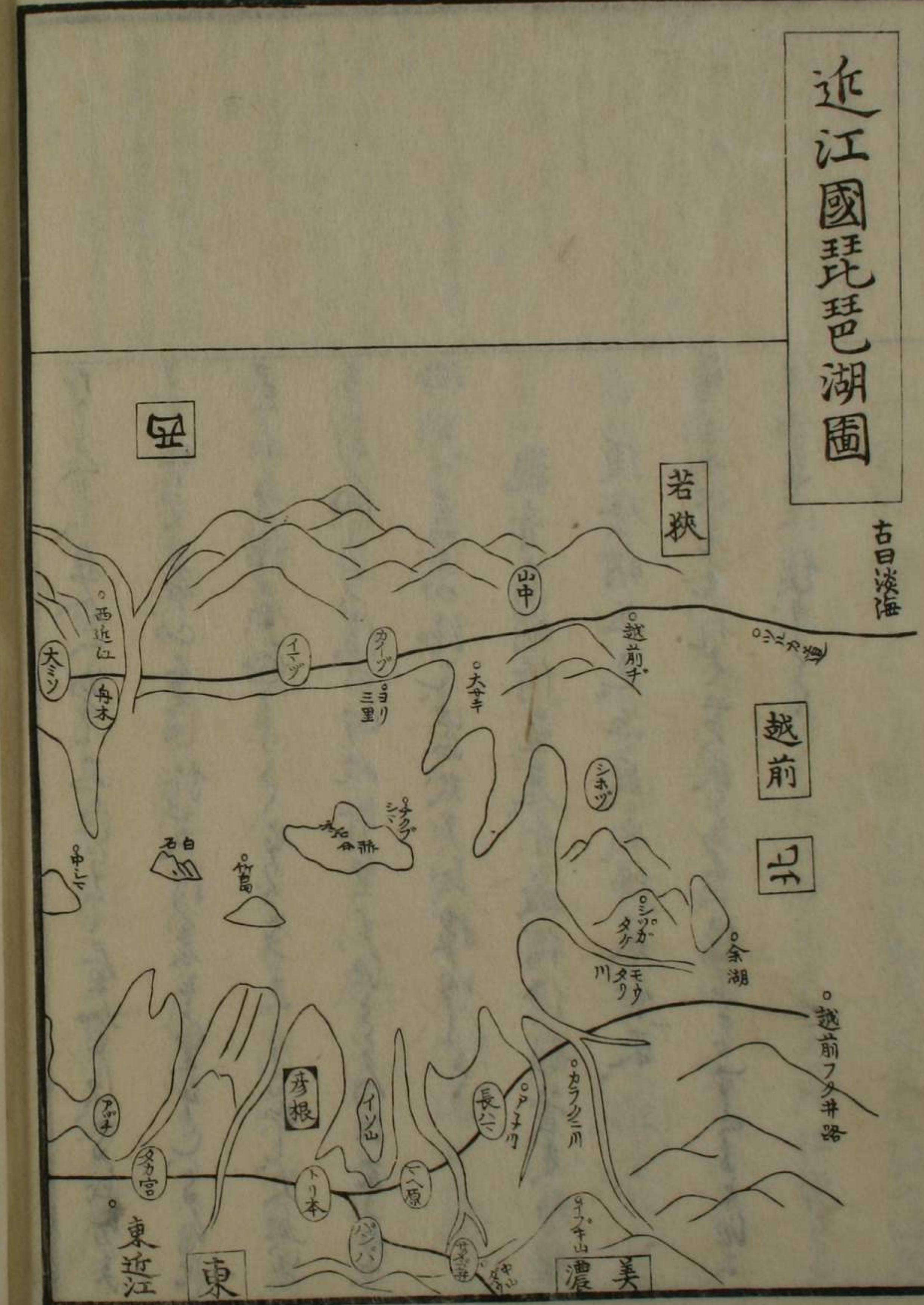
第二
第一日は見つはつて、ねどき艘^{カヌ}、すうすう^舟、
一人轆^{カツ}二つと船^{カヌ}はひりとふか車^{カタマリ}もあらふに
すうすうに坐りて、船^{カヌ}をまわす、高森橋^{アカニ}を
渡る
第三
御^ミまつさうて、ほくと御^ミまつさうて、
ほくと今へやうとあふ
だくし

第四
第一日は見つはつて、ねどき艘^{カヌ}、すうすう^舟、
一人轆^{カツ}二つと船^{カヌ}はひりとふか車^{カタマリ}もあらふに
すうすうに坐りて、船^{カヌ}をまわす、高森橋^{アカニ}を
渡る
第五
満橋^{ミツカ}下へゆき、達川^{タツカ}を泳ぐはく海^{シマ}郭^{コテ}を回^カをと
せ、長松^{ロウソク}柏^{カツラ}、鹿^{ヤク}樓閣^{ル閣}、雲烟^{クモイ}と空^{スカナ}、太^{タチ}実^ミと

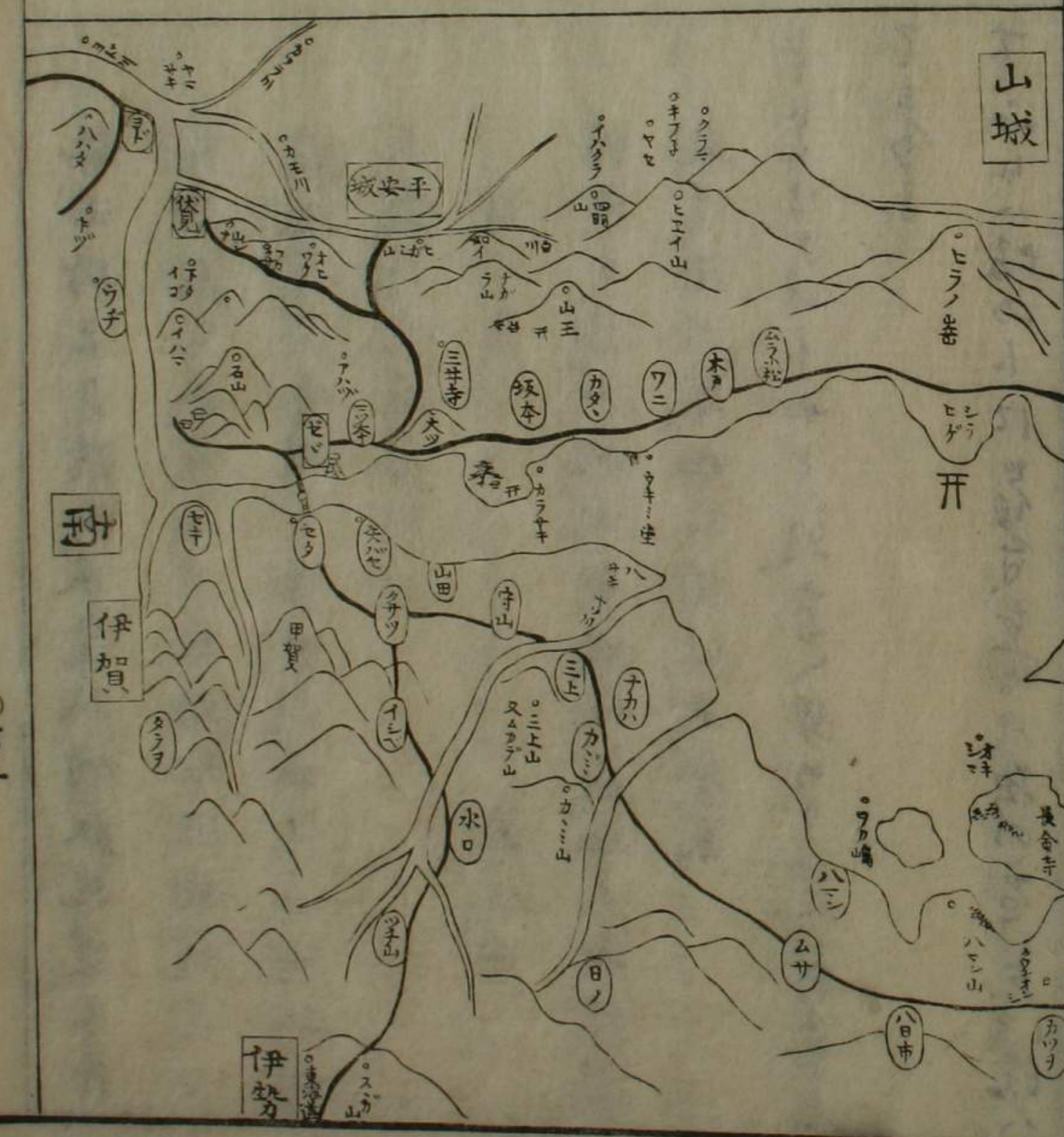
なまくし、左分へ出でた津まで宣傳せり、その功業
アはみき石の寺まで詔すはるを里ナシ、左内比
恩石壁張尼起ハシマツリテ、大無常
ちあ向あり、後の神代駄をよじて、大無常
池は比累との通し、ばふ式ノ以懷印

近江國琵琶湖園

長山子集目言



雙騎行歌明記



勢田橋上夕陽斜、風度孤村收晚霞。
三井鐘聲聞野外、石山月影映江涯。歸帆片片
過蘆荻、高嶺峩々開雪花。雨後唐崎松樹，
色數行鴻雁落汀沙。

稿邊日落_テ、
初月開霧_ニ、
雪映江山_一、
雁鳴鐘_テ、
松風猶似雨聲_二、
來_一。
まはやれ、
まくめり人_ハ。
てまふ。

まくらてはくと、まくらの種あてのぬきをすこひ
サ留目索糸よもぎ
女又日写あはる、しるえの海へ便人イタチ
のとまか正後日都タマカシタマカシ升天スカイ天龍
乃官仙人様ふは萬葉譜もよみのほく館
に有有あられも有りて日本万里ヒルミリさむづけほれ
毛津毛モツモ
女六日清油クレオイルよみくらは、良吉散ヨウキサンをくわせ
産即ち肆スル上とふやのトナリテとよみ
よみ給乃清油クレオイルとくわせ作成爲牛ウシいし

茶などと語りて御事を許して置く

廿七日 漢妻子やまと

廿八日 新坂

宗長は改めて西田人辺仕
今門義高は孫秀樹文政後
安政二年秋水にえ年
子を各自手書きの
かめ仕度乃とまことに
を表す

女九日丸子右内の毛屋は茶屋を通じ取手
石表あり、連寺源家長乃と舊時たり、いわゆ
里と高し、彼の宿をそのねんと呼んで有り
三つ木の里町上原、右の方に山村ハシケナリ
木戸へ入る所は土の壁と瓦の屋根と有り、木
ノ木戸あり、茶屋寺入やもあひて大店
一軒の宿である。設もなし、家長の毛屋をもあれば
うれしからきる。

是より、せせらぎといひの泉あると號名のなむ、家
長の墓とたれねれと庵の隅又源家長と云ふ
石碑も立てて有り、庵下に入り茶屋をと
住むのをのぞくかく家長は朝食を夕節切芦^{アシノクヒトヘキリ}
金など持つてはまちよねましられが不
てのべる

廿九日 鷺はさう久能山一里の人達山、
町乃中とたゞやゝれどハ陽子の毛屋と申
可三里ばかりいそれとばかりは山の防風ハ院雲假^{スイヒ}
みはらす、清高萬ハ所原を越すふる、

茶などと説く能手を詠へた蜀に
女七日演葉子やま

廿一日新坂

宗長は少政元時の人初仕
今川義忠の子孫秀樹が試験
を取る一休が冷々水をえ
よし高子と自号せられ
かめ住處乃とまことに
主教

女九日丸子右内門の毛とほ茶屋を通じ歌を
石表あり、連音源家長乃森崎たういゆ
月と高し、彼と高むとむのゆんと咲きうち門
さくらこ里町と原、右の方に山村ハルカナリあ
すてつたねひ土のゆはすとゆはすとゆはすてつた
しき所あり、茶屋寺入るやくわらうたを書
うれしからきる。設もなし家長の毛とほの

是とあり、せ四とゆとひのゆふとゆふのとゆふのとゆふ、家
長の墓とたぬれと庭の隅と塚とゆふとゆふ
石塊をもみるに墨くのと、厨下に入り茶をとゆ
仕物のとゆふとゆふと家長は觀見タ節切芦^{ハシシクヒトキリ}
金などけやといてゆきまちよねひまればなげ
てゆふ

嘘日鶴はもう久能ひ一まわら人と山人鶴山、
町人やうとたまわづれとハ陽子の毛とゆ
そ三里はうりいそれとほゆよ防全ハ院雲假^{スイビ}
よはらたま、清高萬ハ林原を詠すふとゆふ、

長山子言

前乃父老子は事内シナをもぞしとまほに酒サケをもよぼ
傳キウテ肩カミをうりてぬ門ノよりゆくを 海シマ浦シマツヨのそと

まくさきのとどりあり、ぬれのぬるに疊み枝
あら様の様め、金馬籠等と角めば、もとを
波ありば町をも大つめ内もあふる、鐵把
長脚鎧、狼矢棒、ももと立ちまく、幕希を張る院
を引ぬ士卒も少ひ人馬を絶ど、もとを
ほねびゆ、轔石打ててとく、四五丁の筋へ、坊
金うき、華表櫓門、又主を候うめぬ、諸子と一
もあり、佛子祠よひれど御傳あつてゆ

湯ノ島つれ紹とひのじにまわき、
はる乃
やまと風と、もひく波内と乃まよふ
金の綺麗と、皆持て奉りたること思ひ等
とらう、例よせわざをばる氣もつゝ、ほくはん
ふするありとづく

白玉撐天聳、青嵒傍海開。巨鼈背上色可

自三保望富士山 清見寺山號巨鼇故
三四及此

信日乞蓬萊

一暦二母と爲へて、まづハのちくに行ふ。
十六日午後、すこし風が吹き、水府より有り見に
家へ戻る。

萬里行程西海隈，風霜無恙故園回。
江山踏盡為何事，不是張騫博望才。

明和四年丁亥冬十一月 常州水戸長玄珠記

赤水先生著述出板書名

改正日本輿地路程全圖

唐士歷代沿革圖

全重鐫縮圖

小本宮入

大清廣輿圖

地球萬國圖說

禮記王制地理圖說

和蘭新譯地球全圖

五常圖說

清槎唱和集

唐詩平仄考

東奧紀行

標註
圖重

漢文

是紀行中清客贈答詩文
附 奥羽名山北越七奇
諸州言碑攷

天象管窺抄

文化歲在乙丑孟春

東武

本石町四丁目

小倉仁兵衛

京都

二條富小路
御幸町御池

林 伊兵衛

心齋橋唐物町

藤井孫兵衛

攝城

安堂寺町

木林本太助

高麗橋一丁目

淺野弒兵衛

